

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IX — 1

1981

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IX — 1

1981

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
DA 27

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに9年目を迎え、種々の資料や成果が蓄積されているところです。

ところで、は場整備事業区域も年々増加の一途をたどり、それらの工事と併行して発掘調査が円滑に実施できるよう銳意努力しておりますが、そうした中で得られた成果を公開し、地元へ還元していく作業もまた重要な責務と考えます。

この報告書は湖北地方において昭和56年度に実施した調査結果をまとめたものでありますが、近江の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後に調査にあたり御助力を頂いた関係者ならびに関係諸機関の方々に感謝の意を表します。

昭和57年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課

課長 外 池 忠 雄

例　　言

1. 本報告書は、湖北地方における昭和56年度県営土場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。
2. 調査は滋賀県耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。
3. 本書には伊香郡高月町唐川遺跡及び長浜市永久寺遺跡の2遺跡を収載した。
4. 現地調査や整理作業等に御協力を頂いた調査員・調査補助員等の関係者は各本文中に記載した。
5. 調査・整理及び報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘(永久寺遺跡)・用田政晴(唐川遺跡)が担当した。



本報告所収遺跡位置図

目 次

I 伊香郡高月町唐川遺跡

1. はじめに	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の方法と経過	1
4. 調査の概要	5
5. おわりに	32
(図 版)	

II 長浜市永久寺遺跡

1. はじめに	35
2. 位置と環境	35
3. 調査の経過	35
4. 調査の結果	38
5. 出土遺物	40
6. まとめ	44
7. おわりに	45
(図 版)	

図版目次

I 唐川遺跡

- 図版一 遺跡全景(北から)・I区T5(北から)
図版二 I区T5(南から)・I区T10(北から)
図版三 II区T6・7遺物包含状況・III区T3(北から)
図版四 VI区墳丘全景・VI区墳丘トレンチ調査
図版五 VI区墳丘断面(北から)・VI区遺構検出状況(南から)
図版六 VI区H3遺物出土状況
図版七 VI区H3近景・VI区H3完掘後(南から)
図版八 VI区H1・VI区H1西壁付近
図版九 VI区H1北西隅付近・VI区H1
図版一〇 VI区B1・VI区B2・B3
図版一一 VI区全景・VI区H1遺物出土状況
図版一二 I区T5出土遺物(1)・I区T5出土遺物(2)
図版一三 II区T6・T7・III区T4D1出土遺物
図版一四 VI区H1・VI区H3出土遺物

II 永久寺遺跡

- 図版一 上 遺跡遠景(東より)
下 遺跡遠景(北より)
図版二 上 Tr20全景(東より)
下 Tr20溝状遺構全景(北より)
図版三 上 Tr20溝状遺構東岸部分遺物出土状況(北より)
下 Tr20溝状遺構東岸部分遺物出土状況近景(東より)
図版四 上 Tr20溝状遺構東岸部分土器出土状況(東より)
下 Tr20溝状遺構東岸部分木製品等出土状況(北より)
図版五 上 Tr20溝状遺構中央部遺物出土状況(北西より)
下 Tr20溝状遺構中央部木製品出土状況(北西より)
図版六 Tr20溝状遺構出土土器
図版七 Tr20溝状遺構出土木製品・木の実

挿図目次

I 唐川遺跡

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	唐川遺跡トレンチ配置図	3
第3図	I区T4遺構図	5
第4図	I区T4包含層出土遺物	5
第5図	I区T5・T6遺構図	6
第6図	I区T5出土遺物	7
第7図	I区T5・T10出土遺物	8
第8図	I区T10遺構図	9
第9図	II区T6・T7包含層出土遺物(1)	10
第10図	II区T6・T7包含層出土遺物(2)	11
第11図	II区T6・T7包含層出土遺物(3)	12
第12図	III区T3遺構図	13
第13図	III区T4遺構図	14
第14図	III区T3・T4出土遺物	15
第15図	III区T4・T5・T9出土遺物	16
第16図	IV区T4遺構図	18
第17図	IV区T4出土遺物	18
第18図	VI区墳丘測量図・横断面図	19
第19図	VI区墳丘盛土出土遺物(1)	20
第20図	VI区墳丘盛土出土遺物(2)	21
第21図	VI区遺構配置図	22
第22図	VI区H1遺構図	23
第23図	VI区1号竪穴住居(H1)出土遺物	24
第24図	VI区H2遺構図	25
第25図	VI区H3遺構図	26
第26図	VI区3号竪穴住居(H3)出土遺物	29
第27図	VI区遺構面出土遺物	29
第28図	VI区B1遺構図	30
第29図	VI区B2・B3遺構図	31

II 永久寺遺跡

第1図	遺跡位置図	36
第2図	永久寺遺跡付近地形図及びグリット配置図	37

第3図 Tr20溝状遺構実測図	38
第4図 Tr20溝状遺構断面土層図	38
第5図 Tr20溝状遺構出土土器実測図	39
第6図 その他トレンチ出土土器実測図	41
第7図 Tr20溝状遺構出土木製品実測図(1)	42
第8図 Tr20溝状遺構出土木製品実測図(2)	43

表 目 次

I 唐川遺跡

第1表 各トレンチ出土弥生土器個体数	17
第2表 VI区H 1 遺物観察表	26
第3表 VI区H 3 遺物観察表	28

I 伊香郡高月町唐川遺跡

1 はじめに

本報告は高月北部地区唐川工区の県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。

唐川遺跡は從来の滋賀県遺跡地図には記載されていなかったが、地元の今井清右衛門氏の御教示により唐川集落の南のかなり広い範囲に土師器・須恵器の分布が認められ、また塚状遺構も残存しているとのことで、遺跡の性格等を把握し、保存資料を得るために発掘調査を実施した。

今井氏によれば、土器類はこの地区一帯の耕土土質検査の際に散見されたとのことで、耕土直下から出土するが、ほとんど細片となつて居り、再堆積あるいはかなり原位置から動いているのではないかと推定された。

事前の当時岡山大学大学院生であった桑岡実氏との地表観察によると、唐川集落の南端の畑には須恵器片および若干の灰釉陶器片が認められたが、そこより南の田面には遺物等が認められなかつたので、現集落と遺跡はかなり重複してゐることが予想された。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算(4,297,000円)の再配当をうけ、財団法人 滋賀県文化財保護協会理事長 和田純一へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 協賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師 用田政晴

調査補助員 田中東太・辻享(福井工大)・小竹森直子(岡山大)・荻野良博(滋賀大)・辻裕(滋賀大)・荻野勉(大阪工大)

なお、この調査にあたっては、高月町をはじめ地元唐川の方々にお世話をなつた。ここに記して謝意を表します。

2 遺跡の位置と環境

唐川遺跡は、伊香郡高月町大字唐川に所在する。高月町の北部平野中に標高200mを計る独立丘の湧出山がある。この湧出山南麓に現在の唐川集落があり、中ほどを余呂川支流の赤川が東西方向に流れる。遺跡は、この集落を含めた南北水田地帯の沖積地上に広がり、横山集落の近くまで含まれると考えられる。

微地形を見ると、現在の唐川・横山の両集落は、自然堤防上にあり、その間の水田はやや低地であるということと、遺物の散布状況からかつての集落があるとすれば、現集落と重複するのではないかと予想したのである。

唐川集落のすぐ北にある湧出山の尾根上には、前方後円墳を含む湧出山古墳群、その南斜面には、横穴式石室墳を中心とした唐川古墳群がある。また、横山集落の西には、2基の前方後円墳が遺存する。兵主神社古墳は現在では規模等は不明だが、横山神社古墳は全長38mを計り、おそらく横穴式石室を内部主体としてもつと考えられ、県指定史跡となつてゐる(第1図)。

3 調査の方法と経過

1981年度の調査は、は場整備唐川工区のうち、北陸自動車道より西の部分の約32haを対象とした。発掘は排水路部分と切土計画部分について行うこととし、任意に試掘 sondage を設け、重機による表土(耕土等)除去後、遺構・遺物の検出に努め、その調査結果に基づき、必要と認めたところについて試掘 sondage を拡張した。

調査は、対象地域の北西端から始め、第2図のように、排水路部分に沿ってI区・II区・III区・V区等と称し、IV区

については、排水路と切土が計画されていた北陸自動車道沿い西側の地区を含めた。また、横山寄りの水田中に平面方形の壠状の高まりがあり、古墳と思われたので、これを仮に唐川1号墳と称し、後にVI区と変更した。

この唐川地区周辺では、耕土の下に遺構面をもつ黄褐色が広がる。耕土の下に5~10cmの厚さをもつ間層を含む場合もあるが、基本的にこうした層序をなし、遺構・遺物を伴わない個所は主に灰褐色粘土層や茶褐色砂礫土層が耕土下に広がる。

唐川1号墳は、削平される計画であったため、現状保存を申し入れたが、この地方では、江戸時代の絞首台あるいは、死体焼却場があったといった言い伝えがあり、古墳であるとはとうてい考えられていなかった。従って今回は周辺部において、周濠等の確認調査を行い、古墳等の遺跡であることが明確になれば、改めて保存についての協議に入ることにした。

現地調査は霜刈り取り後の10月中旬から、開始したが、11月の「伊香しぐれ」と称する長雨、それに12月、2月の1m近い積雪にたたられ、加えて重機等の都合で、調査は時おり途絶え、3月20日に一応終了した。

なお、記述の都合上、この報告で用いた弥生土器の形態分類について、ここで述べておく。

出土した土器はほとんど細片でしかも磨耗が激しく、完形品は数点であった。従って主に口縁部による形態分類にならざるを得なかった。また、同一の形態のものでも器形の大小により細分する必要もあると思われるが、細片のため経は推定の域を出ないため、明確なものは別にして特に注意を払わなかった。

〔壺〕

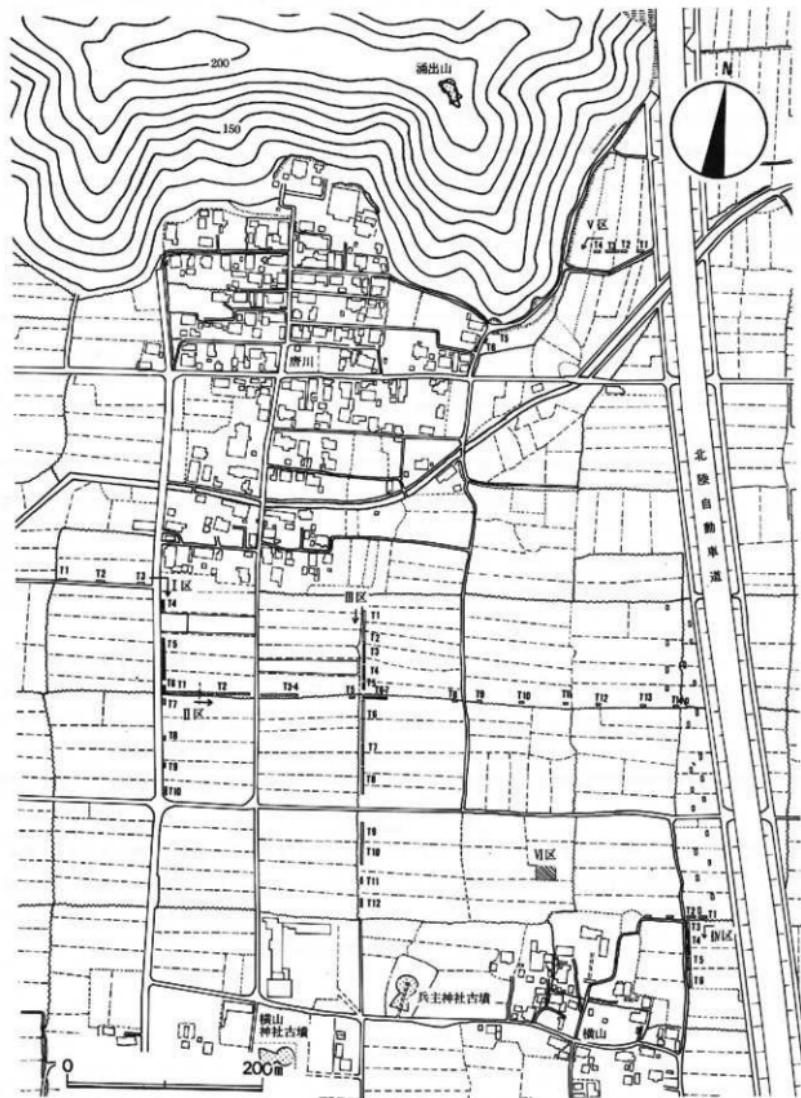
壺はA~Eに大別し、更に細分したため10類からなる。

壺Aはいわゆる二重口縁の壺で頸部下端に貼付突窓をもつものである。A₁(第14図3)は口縁端部水平方向に平端に仕



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | |
|-----------------|---------------------|------------------|
| 1 大曾古墳群 | 16 尾上遺跡 | 31 藤山古墳 |
| 2 西古墳群 | 17 父母古墳 | 32 石作遺跡 |
| 3 西山古墳古墳群 | 18 鹿野遺跡（上納番・須恵器散在） | 33 鹿屋古墳（前方後円墳？） |
| 4 小山古墳群 | 19 みち吉古墳 | 34 鹿屋原古墳（前方後円墳？） |
| 5 泰坂古墳群 | 20 研塙古墳（前方後円墳） | 35 鹿屋原古墳 |
| 6 西古墳群 | 21 長塚吉古墳（前方後円墳？） | 36 大堀遺跡 |
| 7 破野古墳群 | 22 大将軍城古墳（前方後円墳？） | 37 片口遺跡 |
| 8 磯野古墳群 | 23 金屋古墳 | 38 萩守遺跡 |
| 9 宮山古墳群 | 24 鳥山遺跡（発生土器散在） | 39 雨門遺跡 |
| 10 西野古墳群 | 25 鳥山神社古墳（前方後円墳） | 40 沢原北遺跡 |
| 11 古保利古墳群 | 26 真主神社古墳（前方後円墳？） | 41 沢原遺跡 |
| 12 山本古墳 | 27 齋賀西古墳群 | 42 魔界寺遺跡 |
| 13 莫富山古墳（前方後円墳） | 28 齋賀北古墳群 | 43 法光寺遺跡 |
| 14 ゴンベ穴古墳 | 29 蒲生山古墳群（前方後円墳を含む） | |
| 15 尾上浜遺跡 | 30 志川古墳群 | |



第2図 唐川遺跡トレンチ配置図

上げられ、やや口縁内湾気味である。頸部は上開き気味であるが、内側はその上部を中心に更に粘土が貼られ厚手のものとなっている。A₂(第9図1)は頸部下端の突帯にハケ状工具による刺突文をもち、肩部にも頸部のそれとは逆の傾きの刺突文を持つ。1点のみの出土で口縁等は不明である。

壺Bも壺Aと同様の二重口縁の壺の口縁部のみによる分類であるが、資料不足のためAとは別にここでB類としてかけすることにする。口縁端部を斜方向で平担に仕上げたものをB₁、丸くおさめたものをB₂とする。

壺Cは単純に口縁部がくの字に外反する形態のもので、肩の屈折部が厚手のもの(第23図1)をC₁、薄手のもの(第9図10)をC₂、口縁部を拡張する傾向にあり、上端部やつまみ上げ気味のものをC₃とする。また明瞭な屈折部を持たず肩部から口縁にかけてゆるいカーブを描いて外反するものをC₄とする。

壺D・Eはそれぞれ1点のみの出土で、壺Dは直立する単純な口縁で外面にジグザグの沈線文が1条走る。壺Eはくの字に口縁が折れ、やや内湾気味を呈するもので口縁部の内外面共ヘラ磨きである。

[甕]

甕は受口状口縁に類するものを甕A、単純にくの字に屈折する口縁をもつものを甕B、北陸系の口縁部外面に擬凹線を施したり、口縁端をつくるものを甕C、伊勢湾・東海地方西部に中心をもって広がるS字状口縁のものを甕Dと大別し、それぞれを更に細別したため15類からなる。

受口状口縁に類する甕Aは口縁端部上面が平担あるいはやや凹気味のもので、端部は外方向に突出気味のものをA₁同様に端部は外方向に突出気味であるが、端部を丸くおさめるものをA₂、口縁端は直立して終るものをA₃とし肩部外面に3条の横描沈線をもつもの(第14図10)がある。この場合、端部外面はやや凹気味となる場合が多い。A₃と同様に直立気味の口縁をもち、口縁外面にハケ状工具等による刺突文をもつものをA₄、同じく口縁部はA₃・A₄に類するが端部が明瞭に屈曲せず、ゆるいカーブをもって肩から胴に至るものをA₅、受部がゆるく内湾気味のものをA₆とする。

甕Bでは、くの字状口縁を呈するもので単純に外反し、口縁端部を丸くおさめるものをB₁、口縁端が面をもち、その下端をつまみ下げ気味にしたものB₂、逆に端部上面をつまみ上げ気味にしたものB₃とする。また頸部から斜方向に直っすぐ口縁部を形成し、外反しないものをB₄とする。B₅・B₆としたものは口縁部は外反するが、明瞭な頸部をもたず、ゆるいカーブを描いて肩から胴部に至るものであり、B₆はその端部に刻目を施したものという。

甕Cとした北陸系の甕は口縁外面に擬凹線を施したものをC₁、単にヨコナデあるいは指押さえに終ったものをC₂と分類する。

甕Dは東海系のS字状口縁甕であるが、1点のみの出土であり、胎土からも在地のものとは区別しうるものである。

甕・甕の底部片もいくつか出土しているが、脚台を備えたものは量的には少なく、圧倒的に単純な底部となる。脚台は薄手で内湾気味、端部は内面に折り込んだもの、薄手で外開き気味の体部をもち端部は外方に少し張り出したもの等、東海系と思われるものが目につき、小形・厚手のいわゆる在地産の脚台は見られなかった。

[高坏]

高坏はA・B・Cに大別し、Aは更に2類に分けられる。

高坏Aは口縁部が外反するもので、外反するカーブが大きく、端部は平担に成形したもので、A₂は外反度がA₁より水平に近づいた形をとり、端部が丸くおさまるものをいう。

高坏Bは受部と口縁部との境がなく、全体にゆるく内湾する坏部をもつものをいう。

高環Cは環部が深く、いわゆる欠山式の高環に類するものである。

〔器台〕

器台はA～Dに大別し、更に細別を試みた。

器台Aは真っすぐな受部をもち、口縁に垂下する櫛描沈線を施した面をもつもので、棒状浮文を3個セットで4方向に備える。

器台Bはやや外反気味の受部をもち、端部を拡張し、端面に沈線を施すものをB₁、同様のもので大形のものをB₂、かなり厚手で端部は上下に拡幅気味のものをB₃とする。

器台Cは真っすぐな受部のまま終るもので、端部は斜方向の平担面に仕上げているものをC₁、ややつまみ上げ気味のものをC₂とする。また、ゆるやかに外反する受部をもつ小形のものをD類とした。

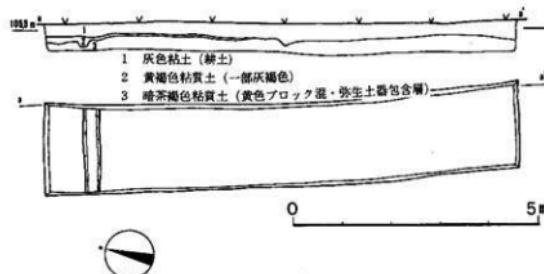
4 調査の概要——遺構と遺物

(1) I 区

I区と称したのは、計画区域・北西端から、東へ向い、農免道路からは、南へ向う排水路部分をいう。T1～T10の10ヵ所の試掘場のうち、T4で弥生土器の包含層が認められ、T5では、瓦類・須恵器の散布が認められた。又、更に、溝状遺構も検出されたため南へ拡張した。またT10では、東西方向に走る溝2条がみつかったが、遺物は埋土から弥生土器が1片出土したのみであった。

(T4)

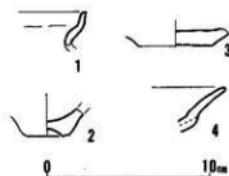
T4は基本的に3層からなり、耕土が第1層、黄褐色粘質土の薄い堆積を第2層とし、弥生土器を含む暗茶褐色粘質土(黄色ブロックを含む)を第3層とした。遺物は細片で、量的にも少量であった。主にトレンチの北半に散在していた。トレンチ北端で東西に走る幅30cm・深さ5～10cmの溝が1条検出されたが



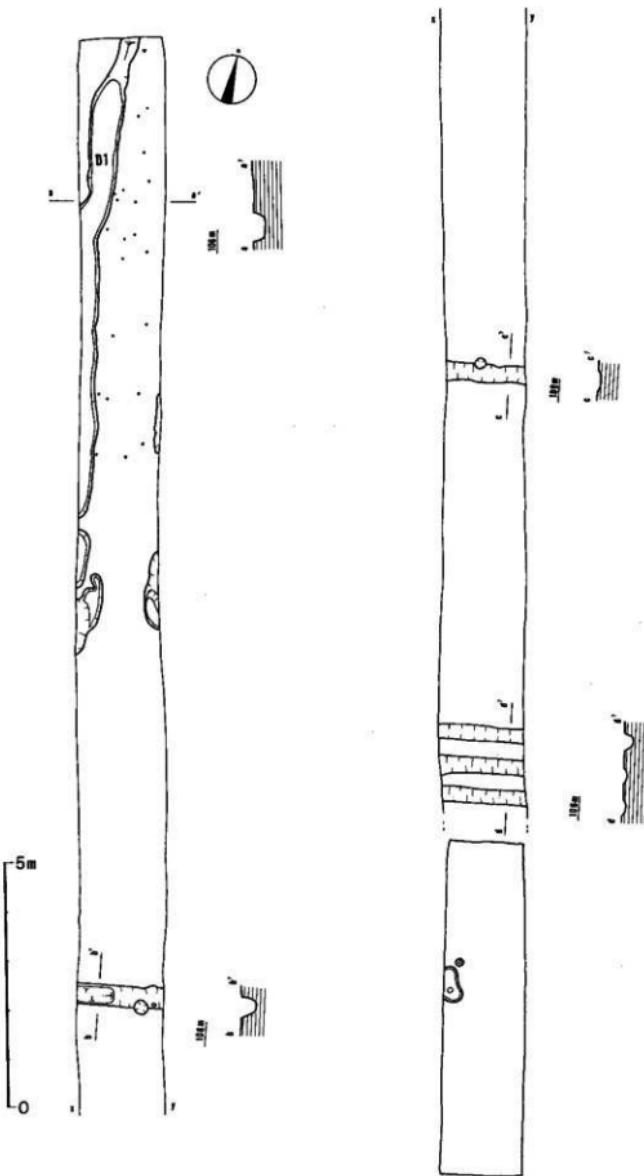
第3図 I区 T4 遺構図

少くとも古墳時代以降のものである(第3図)。

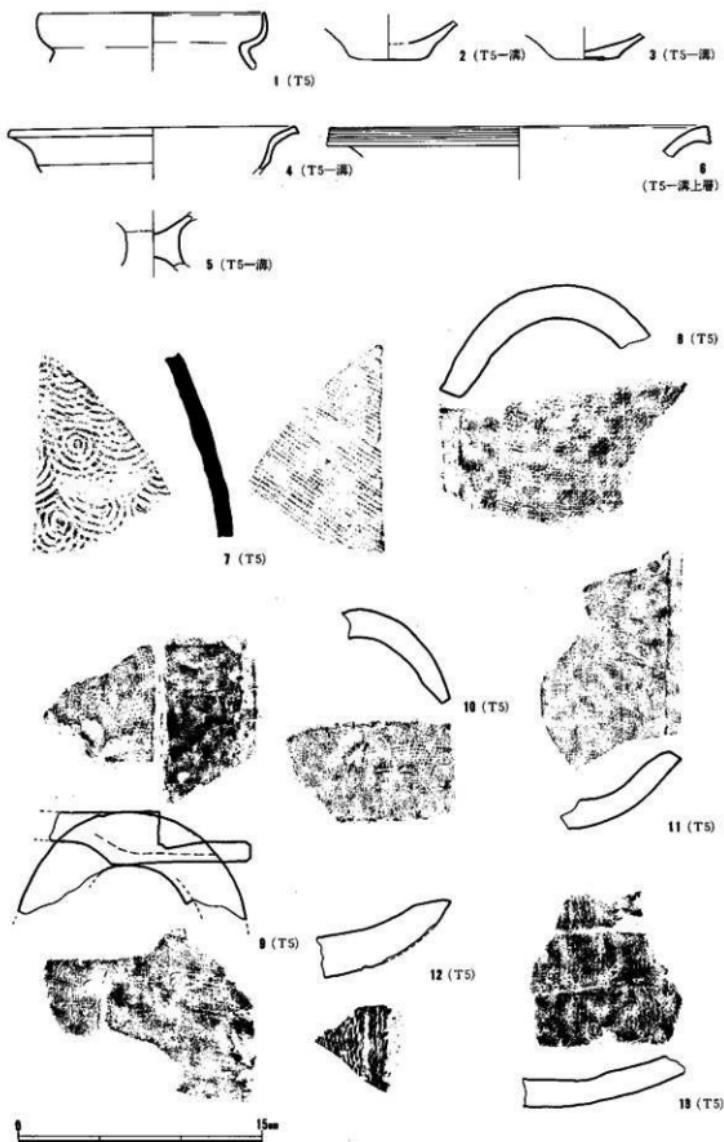
包含層中遺物として、腰4・高環2・器台2個体、そして底部片2が出土しているが、いずれも小片で磨耗しているため、図示するに至ったのは4点のみである。(1)の腰の口縁受部外面には長楕円形の刺突文が斜方向に施されている。(4)は高環の口縁部片である(第4図)。



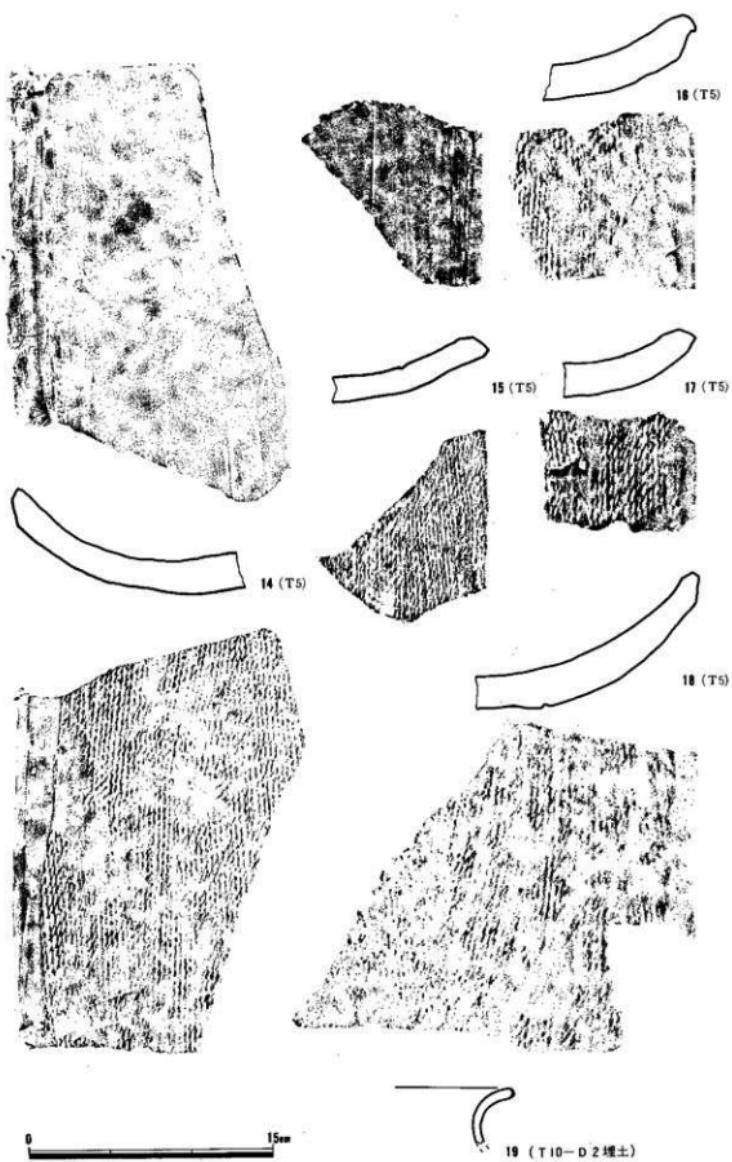
第4図 I区 T4 包含層出土遺物



第5图 I区T5、T6遺構圖 (・は瓦片出土地点)



第6図 I区T5出土遺物



第7图 1区T5、T10出土遗物

(T 5)

T 5 では、耕土を除去するとすぐその面で、溝状遺構・ピットが検出された。北半の溝は、ほぼ北から南へ向うもので、幅は広いところで、80cm程度で、深さもほぼ30cm程度である。それにつづくトレンチ両端のピット群(P 1~P 4)も、この溝の延長か同様のもので、埋土も暗茶褐色粘質土で、均一であり、いっしきに埋まつたような状況を呈する。その埋土中に弥生土器細片が含まれる。また遺構面からは須恵器・瓦類が出土している。

溝は人工的な形態をなさず、埋土も、T 4 で見られた包含層そのものであるため、包含層の自然流路・土壤への堆積と考えられる(第5図)。

また、この北半の溝付近では、瓦片が散在しているが、完品はなかった。また軒瓦も見られない。ここは、寺院跡等に伴う瓦溜まりといった状況とは、その様相が若干、異なるようである。

弥生土器は壺1・甕7・高杯1・器台1・底部片2・高杯簡部1個体ずつ認められる(第6図・第7図)。(1)の甕は口縁がやや内湾気味のゆるい受口状を示す。甕底部(3)がややくぼんでいるのは輪積みの後、底を埋めたためである。器台(6)は口縁端部に横描沈線を施している。いずれも磨滅が著しく、調整は不明である。

丸瓦は凸面ケズリ又はナデ、凹面やや荒い布目のもの82点、凸面ケズリ又はナデ、凹面細い布目のもの2点以上、凸面ケズリ又はナデ、凹面細い布目をケズリ又はナデ消したもの1点、凸面に凹面より荒い布目がある玉縁をもち、凸面ケズリ、凹面布目のもの91点、同類で玉縁部分のみ80点2点、凸面ケズリ又はナデ、凹面タテハケ状痕跡をもつもの1点、凸凹面ともケズリのもの1点、計10点(個体)以上になる。平瓦は凸面縦目タタキ、凹面布目で須恵器の焼きを示すもの(14・15)3点、凸面やや荒い縦目タタキ、凹面布目で生焼けのもの84点、凸面やや荒い縦目、凹面は布目をほぼ全面にわたりナデ又はケズリで消したもの(17・18)2点、凸面細かい縦目タタキ、凹面同上で黒色のもの82点、凸面ケズリ、凹面荒い布目のもの83点1点以上、凸面ケズリ、凹面細かい布目のもの84点以上、凸面ケズリ、凹面ケズリ又はナデ4点以上、凸面不明、凹面布目のもの3点以上、計32点(個体)以上となる。

T 5 南半では、東西に走る溝5条が検出できたが、規模はT 4 の溝と同様で、それに伴う遺物はない。この付近の地形は東が上であるため水田耕作に伴う施設と考えてよいであろう。

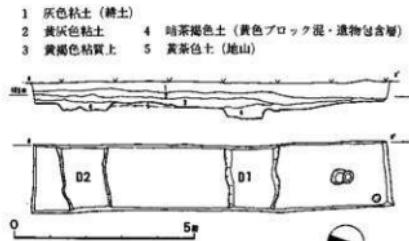
(T 10)

T 10 の東西方向に走る溝は幅は1.2~1.3mで、3.3mの間隔をおいて2条、認められる(第8図)。深さは、双方共26~30cmといったところで、平底状を呈す。寺院の寺域を示す柴地に伴う溝に似るが、溝(D 2)の埋土中からは、弥生土器片が1点出土したのみであった(第7図)。

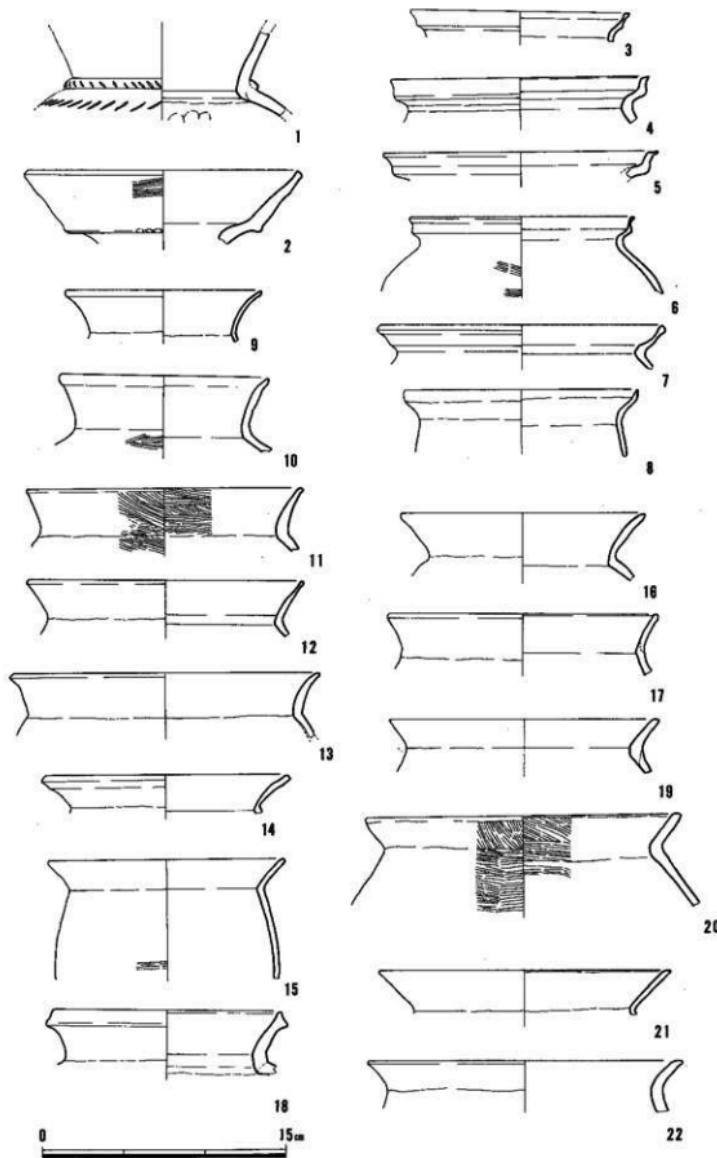
T 10-D 2 埋土から出土した甕は、丸くおさめた口縁部端に刻目らしきものが認められるが明瞭ではない。1~2mm大の砂をかなり多量に含む荒い土で、T 5 出土の土器が2~3mm大の砂を含んでいる点とくらべると胎土は明らかに異なる。

(2) II 区

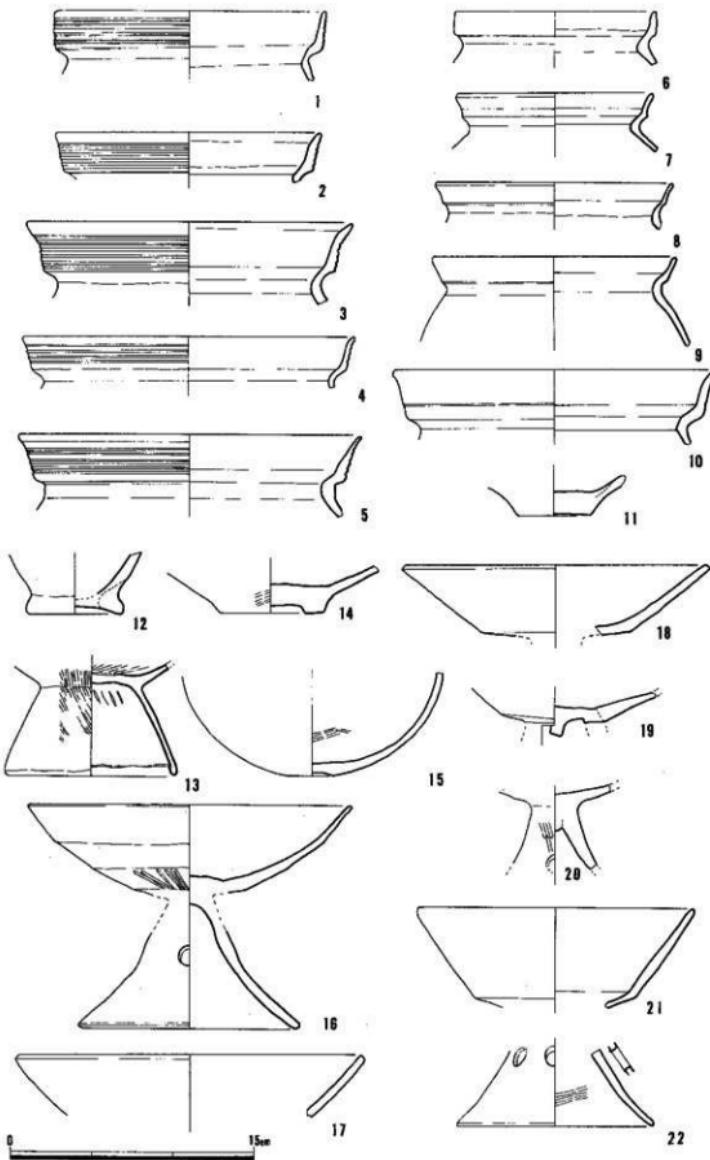
II区は、I区のT 6~T 7 の間から東へ向かう排水路部分にあたり、T 1~T 14まで試掘壕をあけ、T 3 と T 4 、T 6 と T 7 を後にそれぞれつなぎ、T 1・T 2 付近も予定路線はすべて調査した。



第8図 I区T10遺構図



第9図 II区T6、T7包含層出土物(1)



第10圖 II區T6、T7包含層出土遺物（2）

T 1からT 7にかけては、須恵器・土師器・弥生土器等の散布が認められたが、遺構は検出されなかった。また、T 3・T 4では耕土直下の黄褐色土層から瓦片も若干出土したが、これらの遺物は細片であり、特にT 6・T 7では、耕土下層の灰茶褐色砂礫土層(赤紫色のブロック混)中に、弥生土器が折り重なっている部分が認められた。T 8～T 14までは、砂礫土層が耕土の下の主な土層となっており、遺物・遺構は皆無であった。

このT 6・T 7付近は、IV区とも関連するが、明らかに再堆積という状況であり、砂礫を含む土層中に、細片として在るということは、IV区のT 4などの状況と酷似している。

(T 3・T 4)

II区T 3の条里に伴うと思われる溝からは高環A₂ 1・器台C₁ 1点出土し、須恵器環の高台部分が1点、9世紀前後の环身および蓋もみられる。

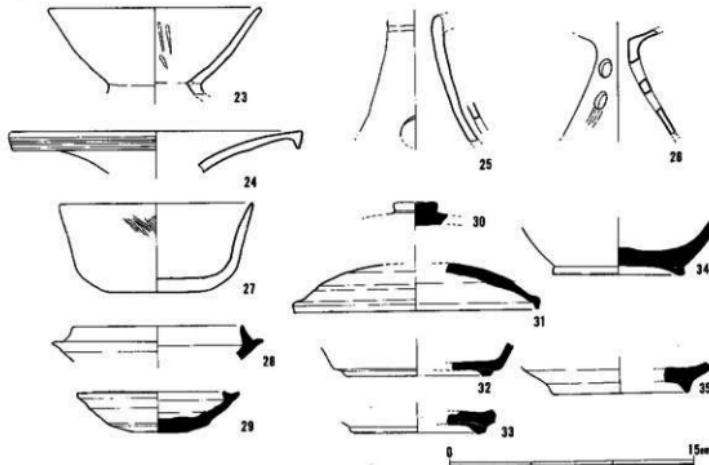
II区T 3・T 4包含層からは、弥生土器・須恵器・平瓦が出土している。

弥生土器は甕7・高環1個体分。須恵器は环身高台部分が1、环身1、环蓋1、甕2個体分である。环身は6世紀前葉、蓋は6世紀後葉のものである。

平瓦は凸面繩目タタキ、凹面目のもの2点、凸面やや荒い繩目タタキ、凹面布目をほぼ全面にわたりナデ又はケズリで消したもの1点、凸面細かい繩目タタキ、凹面前頭で黒色のもの1点の計4点だが、いずれも小さな破片である。

(T 6・T 7)

II区のT 6・T 7包含層中からは器種の判別可能なもので140個体余りの弥生土器ないし古式土師器片が出土した(第9図・第10図・第11図)。内訳は泰15・高環11・器台4・底部片4・高环脚部片3・器台脚部片2の他、須恵器环身11・环身高台部6・环蓋8・灰釉陶高台部2・灰釉縁口縁部4・山茶柄3となる。また土師器楕(27)もある。



第11図 II区T 6・T 7包含層出土遺物(3)

甕(1)は頸部下端の貼付突帯と胴上部に刺突文を持つ。甕(3)～(5)は受口状口縁を呈し、口縁端を平坦あるいはやや凹気味に仕上げる。甕(6)はいわゆるS字状口縁であり、器壁も薄く、胎土は灰褐色を呈し、他のものと明確に区別ができる。

甕B類(1)～(7)、(9)～(12)には(1)～(5)のように口縁内外～胴部を全てヨコハケで調整したものと、口縁内外共ヨコナデ、胴部外面ハケメ調整の2種があり、後者の割合が高い(第9図)。

第10図の(1)～(10)は北陸系の甕で(1)～(5)は口縁外面に擬四線をもつ。2～3mm大の砂を多量に含む点と淡黄褐色系等の色調を呈する点等、在地のもの一特にB類と胎土で区別が可能である。(10)の脚台は器壁が薄く、つくりも良い。在地のものではないだろう。(10)・(11)はゆるやかな环部をもつB類の高环である。内外共ヘラミガキである。(10)は2方向にスカシをもつ。脚・脚は环部が差し込みであることを示す。(12)のスカシは外方から穿孔したものであるが、何ヵ所かは不明。(12)は壺で内外共にヘラミガキ。この地区では壺類の中で最も多く在る類である。

器台(10)は沈線を施す。第11図の(20)～(23)は6世紀後葉～8世紀代に至る須恵器類、(30)・(34)は山茶碗であり高台部底にはモミ痕が認められる。

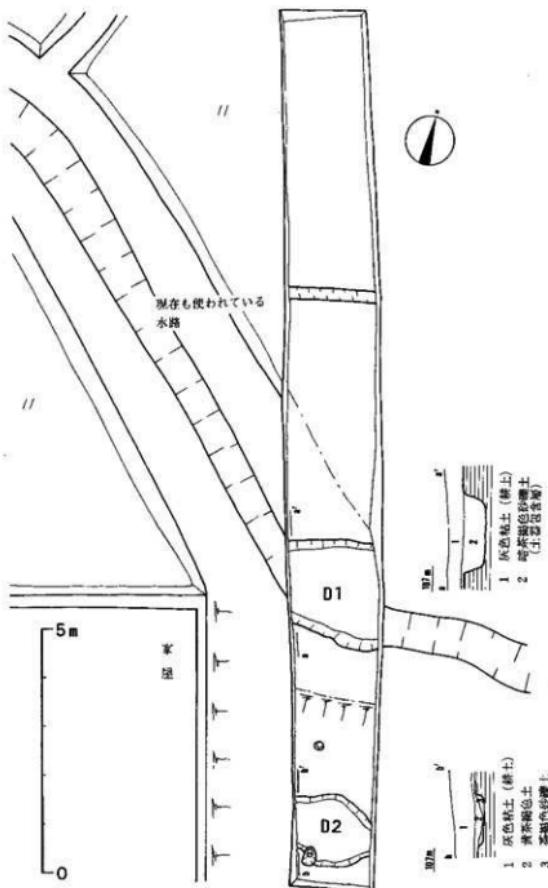
当トレンチの特徴は甕A₃・甕B₁が多く、特にA類においては受口縁端が外方に突出したものが多い。又、北陸系の甕がある程度量的にまとまっている点、高环が多いのも特徴である。

(3) III 区

は場整備計画地域のほぼ中ほどを南北に計画されている排水路部分をIII区と称した。

T 1～T 8まで土師器・須恵器等の遺物を伴うため、ほぼ全線にわたり調査した。

T 3ではトレンチの南半に2条の溝D 1・D 2が検出された(第12図)。D 1は、現代の浅い溝と重複しており、現代の溝よりその規模は大きく、上幅は2m前後を計り、深さも50cmの平底をなす。D 2は浅く、平面形でみると土壇である可能性もあり、埋土に若干の黄茶褐色土を上層にもつ。またT 4では第13図のように、主に東西方向に走る溝5条と、多數の土壇を検出したが、D 3などは、底はボコボコしており、特に土壇は不定形で、これらの埋土はP 1とP 3を除き暗茶褐色砂礫土で、弥生後期～古墳時代初頭の土器の細片を含む。この上層は、T 3での特



第12図 III区T 3 遺構図

にD1の埋土と同一のものである。

これらの遺構の形態と、埋土の状況から、I区T5でみられたような、何らかの原因により自然流路や土嚢がいっきに埋まつたものと考えられる。

T5でも2個のピットが西側辺に沿って検出されたが、これもT3・T4と同様の埋土をもつ。

III区T3-D1からは壺5・器台脚部1と須恵器高环1個体出土。(1)は内径の方が広いスカシを4方向にもつ。(2)は3方向にスカシを穿ち、短脚一段になる可能性もある。

D2からは壺1(C4)、須恵器环身1(8世紀後葉)の2点のみ出土。

III区T4での遺構外では壺1・壺2・高环3・壺底部1・器台3個体出土。器台(3)のくびれ部内面には薄い粘土の貼りつけ痕が認められる。須恵器は环身高台部分3脚など3、环身1脚など2、壺30点と灰釉楕1、青磁楕1個が出土する。

またT4-D1からは壺10・壺19・高环2・器台2個体出土し、壺(3)は頸部下端に尖った凸帯をもつ。頸部内面に指頭により粘土を貼り付け、肥厚させているため、頸部内面は円筒状をなす。壺(5)の口縁端には凹線文に似た調整がわずかに認められる。

T4-D2では6世紀初頭の須恵器の环蓋が1点出土。

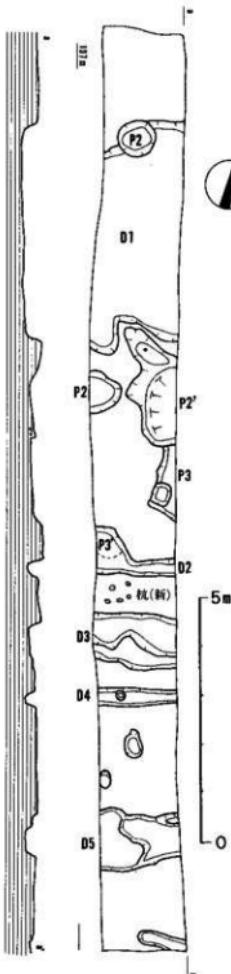
T4-D3では壺2点と砥石1点出土。壺(2)の口縁外面はやや凹気味で内外共ヨコナデ調整である。砥石は緑灰色の堆積岩系のものを石材とし、端部付近に筋砥石風の2条の溝をもち、中央にゆくにつれて表面は丸味を増す。相当使用されているようである。

T4-D5では壺3・壺4・器台1と須恵器环身1点、灰釉楕高台部2点出土。壺(9)は厚めの直口縁外面にヨコナデ整形の後、1条のヘラ描沈線をジグザグに施す。内面には粘土継ぎ目が残存する。壺(9)の口縁外面は擬凹線をもち、胴部には、わずかにヨコハケが残る。

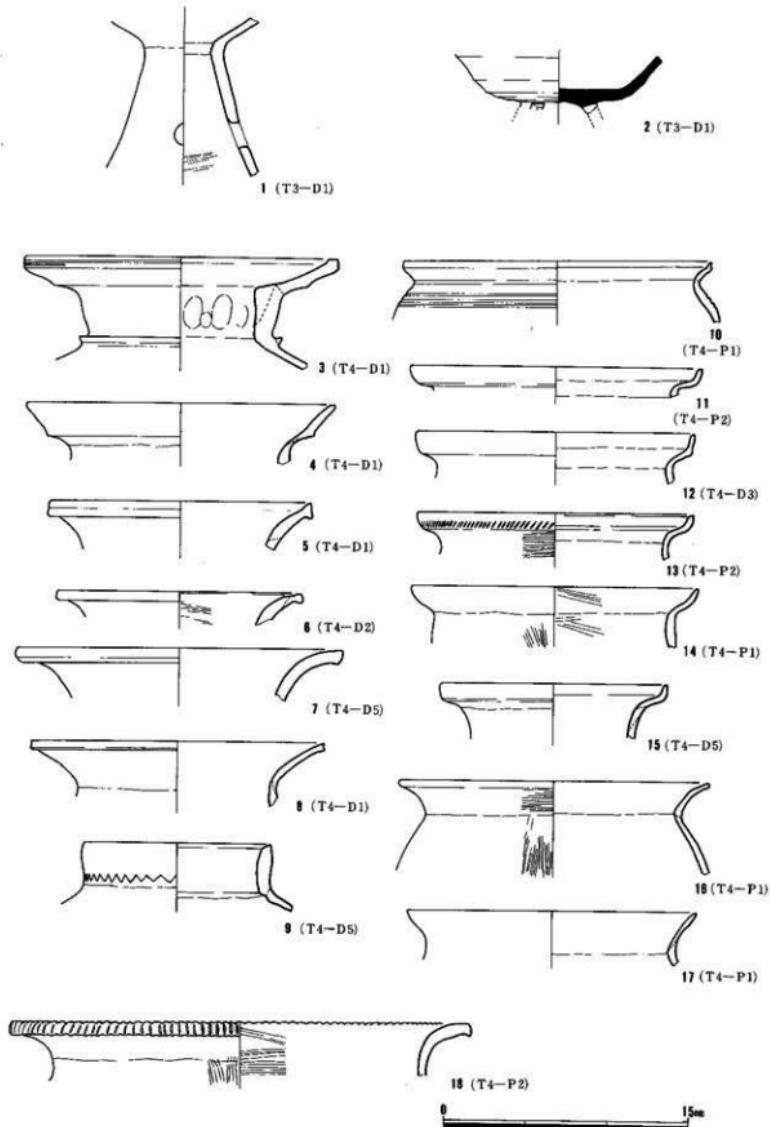
他にP3から出土した壺(10)は胴上部に3条の擬凹線をもち内面はヘラケズリと思われる。また壺(10)・(11)はやや器壁が薄く、器台(1)は上下に強く張り出した口縁外面に擬凹線を施し、その上に2本1单位の棒状浮文をおそらく6方向に貼付ける。棒状浮文には浅く刻目がつく。小形器台(2)は口縁端をヨコナデで丸くおさめ、それ以下を内外共ヘラミガキによって仕上げる。

T4-P2から出土した壺(13)は口縁部をヨコナデした後に外面に刻目を施す。胴部は内外共にヨコハケである。壺(13)は口縁端全体を刻目で加飾しており、そのため口縁端の上下は軽い波状を呈す。胎部は内外共にハケメ調整で胎土に雲母を含む。

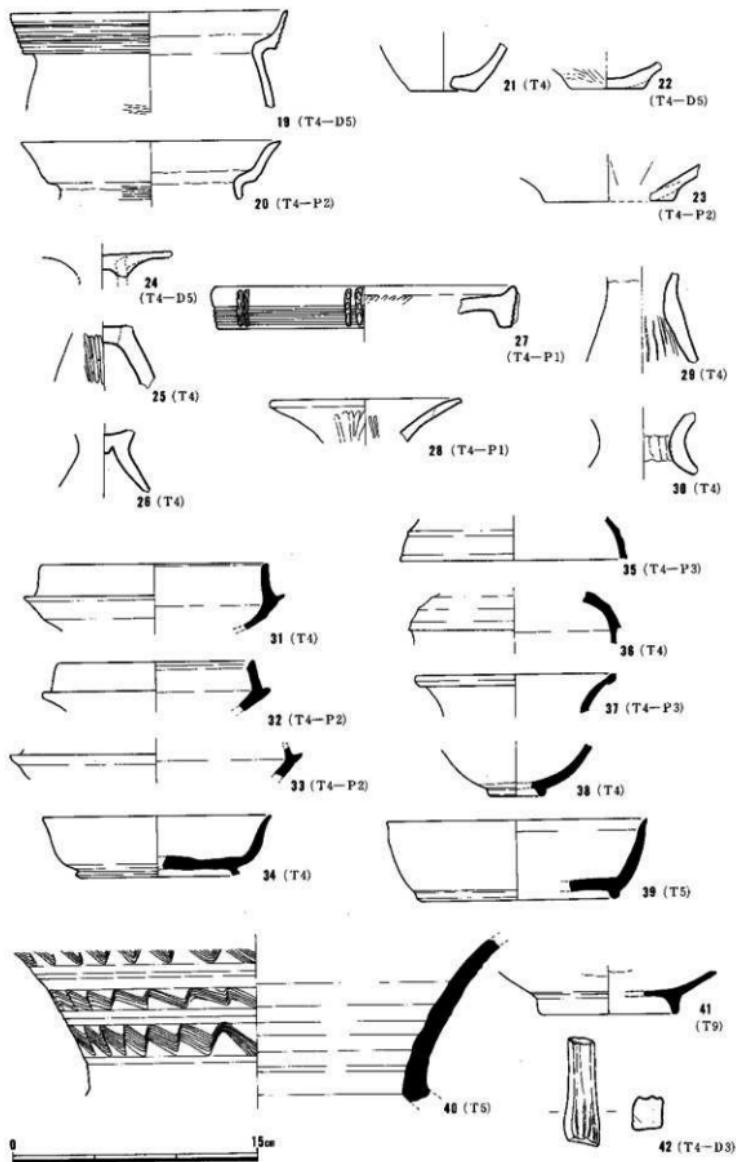
III区T5では須恵器环身1脚・壺(1)・灰釉楕1点出土。壺(1)の外縁にはややくずれた橢描波状文を施す(第14図・第15図)。



第13図 III区T4 遺構図



第14図 Ⅲ区 T 3、T 4 出土遺物



第15圖 III區 T 4、T 5、T 9出土遺物

I-T 4

		高坏		器台	
A ₁	B ₁	B ₂	A ₃	C ₁	D
1	1	2	2	1	1

I-T 5

		高坏		器台	
C ₄	A ₆	B ₁	B ₂	B ₄	A ₁
1	2	1	2	1	1

II-T 3・4

		高坏			
A ₄	A ₅	A ₆	B ₁	B ₂	A ₃
1	1	1	3	1	1

II-T 6・7

		高坏		器台	
A ₃	B ₁	B ₂	C ₃	C ₄	E
2	2	2	2	1	6

		高坏		器台	
A ₁	A ₂	B	C	B ₁	C ₁
6	3	1	1	1	2

III-T 3-D 1

		高坏		器台	
A ₄	A ₅	B ₁	C ₃	A ₁	D
2	2	1		1	1

III-T 4

		高坏		器台	
C ₄	A ₅	A ₆	A ₁	D	
1	1	1	1	1	

III-T 4-D 1

		高坏		器台	
A ₁	B ₁	B ₂	C ₃	C ₄	A ₂
1	2	3	1	1	2

		高坏		器台	
A ₄	A ₅	A ₆	B ₁	B ₂	C ₂
2	1	1	1	1	1

III-T 4-D 5

		高坏		器台	
C ₃	C ₄	D	A ₄	A ₅	A ₁
1	1	1	1	1	1

III-T 4-P 2

		高坏		器台	
A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	B ₁	C ₁
2	3	1	1	1	1

III-T 4-P 1

		高坏		器台	
B ₂	C ₂	A ₁	A ₃	A ₄	D
1	1	2	1	4	1

第1表 各トレンチ出土弥生土器個体数

(4) IV 区

北陸自動車道すぐ西側の排水路計画部分と切土部分に、 $2 \times 5\text{ m}$ の試掘壕を31ヵ所設けた。大部分の試掘壕では、耕土下が砂礫土層や、青灰色粘土層で遺物であった。そのうち土師器片が検出されたT 3-T 6について、南北に拡張して精査した。

T 1・T 2・T 3では土師器及び須恵器の細片が若干出土したが、明確な遺構はなかった。

ここでは、T 4の遺構図を示したが(第16図)、これも明瞭に人為的と思われるような遺構ではなく、自然流路と思われる3条の溝とピット群のみである。このトレンチでは時代の下がる遺物のみ出土し、灰釉碗2、土師質小皿(1)など2、山茶碗1、白磁碗(4)1、天目茶碗1である。またT 4-D 4では(2)の土師質小皿片が出土する(第17図)。

(5) V 区

V区と称したのは、唐川集落の北東、湧出山山裾の排水路部分がそれである。東から西南へ6ヵ所のトレンチを設けたが、遺物・遺構は検出されなかった。耕土下においては、T 1で茶褐色砂礫土、T 2・T 3・T 4では茶褐色土で、その下は赤茶褐色粘質土の地山となる。T 5・T 6でも耕土下は厚さ5~10cmの薄い淡黄褐色土で、その下はすぐ地山となる。

(6) VI 区(塚状遺構)

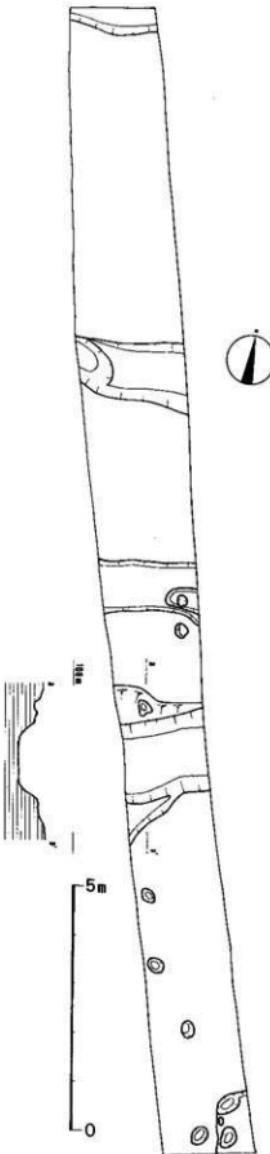
ここは、田面中に長方形の塚状高まりがあり、当初、仮に唐川1号墳と称したところである。

横山集落寄りの条里が良好に遺存する中、条里方向に合わせて $16.2\text{ m} \times 20.5\text{ m}$ の規模をもち、高さは約1.2mを計った(第18図)。数年前まで柴畠として利用されていたらしいが、現在は荒地のままとなっていた。

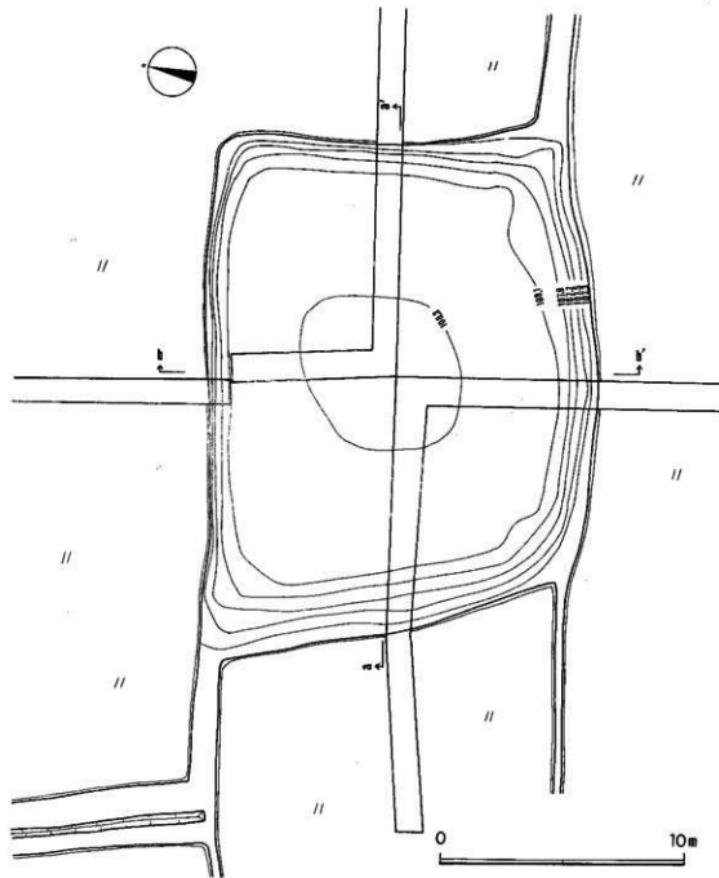
当初、保存のための根拠を得るために、周囲に5本のトレンチを設け、調査を行ったが、耕土下は茶褐色砂礫土層が広がり、古墳の周濠らしいものの痕跡は認められなかった。しかし、土師器の細片が数点検出されたため、墳丘内に十字形のトレンチを設けることにした。

(盛土部分)

墳丘トレンチの5~10cmの表土(腐植土)をはがすと、一面に5~15cm大の凹

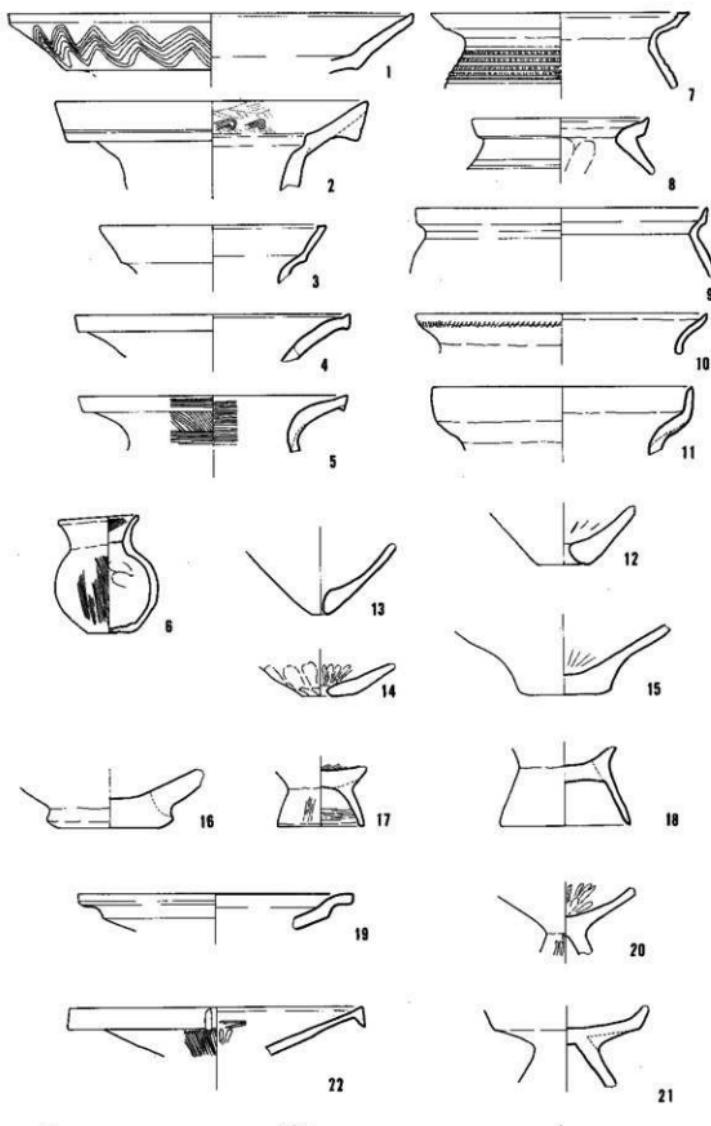


第16図 IV区 T4 遺構図



- | | | |
|-----------------------|--------------------|----------------|
| 1 茶褐色腐蝕土 (須恵器・灰軸混) | 3 黒褐色粘質土 (旧耕土・浮生泥) | 7 灰青色粘土 (耕土上) |
| 2 黄茶褐色砂礫土 (土師器・旁生土層混) | 4 茶褐色粘土 (浮生泥) | 8 茶褐色粘質土 (鉄分含) |
| 2a 喙褐色砂質土 | 5 紫黃褐色土 (浮生泥) | 9 灰褐色砂礫土 |
| 2b 茶褐色砂礫土 | 6 黃褐色粘質土 (地山) | |
-
- | |
|------------------|
| 1a 繩のみ (既掘・須恵器混) |
| 1b 茶褐色砂礫土 |
| 4a 紫黃褐色砂礫土 |

第18図 VI区填丘測量図、横断面図



第19図 VI区填丘出土遺物（1）

礫が広がり、古墳の葺石とも考えられた。そこでこの面で精査し、写真・図面等の記録を取ったが、その石は並べるという状況とは考え難く、また斜面部には認められなかったので、更に掘り下げた。

円礫は葺石状を呈さず、茶褐色土中に大量に混在するもので、一部に須恵器片・灰陶器片も含み、厚さも30cmから所によっては70~80cmにわたり堆積していた。その下部は基本的に黄茶褐色粘質土となり、大量の弥生土器・土師器片を含んでいた。ほとんど細部でこの環状遺構は、別地点からの盛土再堆積によって形成されたものと判明した。

壺(1)は幅広い口縁外面にヘラミガキの後、横描波状文を施したいわゆるパレススタイルのものである。壺(2)は口縁外面に断面三角形の粘土を貼り付け肥厚させている。内面には横描文又は刺突による文様を配し、段を有する。小形壺(6)は乳茶褐色を呈し、非常に細かいハケを器面に施す。壺(7)の胴部上半にはタテの横描沈線文の後に横方向の沈線文を施す。壺(8)の内面はヘラ削り。壺底部(3)~(10)は焼成前穿孔で、特に(10)の内面はヘラミガキと言つて良いほどになめらかである。脚台(9)の底部外面には指頭圧痕があり、底は充てんしたものと思われる。(9)は底の浅い高壺。薄く長い高台を持つ灰陶碗(11)は内外に淡緑灰色の釉を付着している。(11)の底部は回転糸切りによる。山茶椀(12)の高台部にはモミ痕が残存し、内・外に淡緑灰色の自然釉がかかる。脚(13)の鉄鍛には軸取り付けの桜の樹皮が残存しており、断面はレンズ形を呈している(第19図・第20図)。

前述のようにこの塚は基本的に大きく2層に盛土されていることがわかつたが、こうした盛土も断面を見ると計画的ななされたものとは考え難かったが、とりあえず薄く層序ごとにプランを確認しながら、遺物のとり上げを行った。

(盛土下部分)

こうして盛土の除去を地山直上まで行って精査したところ、竪穴住居3軒と掘立柱建物3棟、櫓1棟そして焼土面が3ヵ所に検出された。中央の竪穴住居はほぼ完存で、これをH1、南東部の2軒の竪穴住居は切り合っており、その南は砂礫土層によって搅乱されていた。この古い方をH2、新しい方をH3、と称した。また掘立柱建物は、東からB1・B2・B3と呼ぶことにした(第21図)。

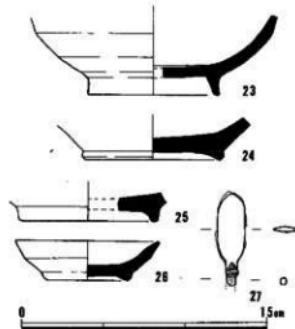
これらの掘立柱建物は、H2・H3を搅乱している砂礫土層上にも一部、その柱穴が設けられていたため、明らかに竪穴住居より新しい時期のものと考えられた。

(H1)

H1は、6.6m×6.6mの平面方形を呈し、主柱穴を4ヵ所にもつ。また、補助柱穴を東・西に2ヵ所ずつ設けている。中央に浅い凹みをもつ炉跡があがり、焼土がおよそ1.3m×1.2mの範囲に広がる。また、周囲には幅5~20cmの壁体溝を備え、部分的にその壁体溝底に、径約5cm深さ5~10cm程度の小ビットが検出された。更には西側壁体を中心にしてその上半部にも、住居中央から斜方向に径5cm~10cm程度のビットが穿かれ、屋根を支える垂木のためのビットと判断したが、それらの間隔は、まちまちであり、また集中する部分もあり何回かの垂木を含めた屋根の吹きかえが想定される。

住居床面の北西コーナーには、幅10~20cmのT形の深い溝も検出され、その溝底にも等間隔に小ビットの痕跡が認められた。更に西側近中央付近で壁体溝につづく形で、不定形の深さは10cm足らずの凹みが検出された。これは一般に貯藏穴と称されているものである(第22図)。

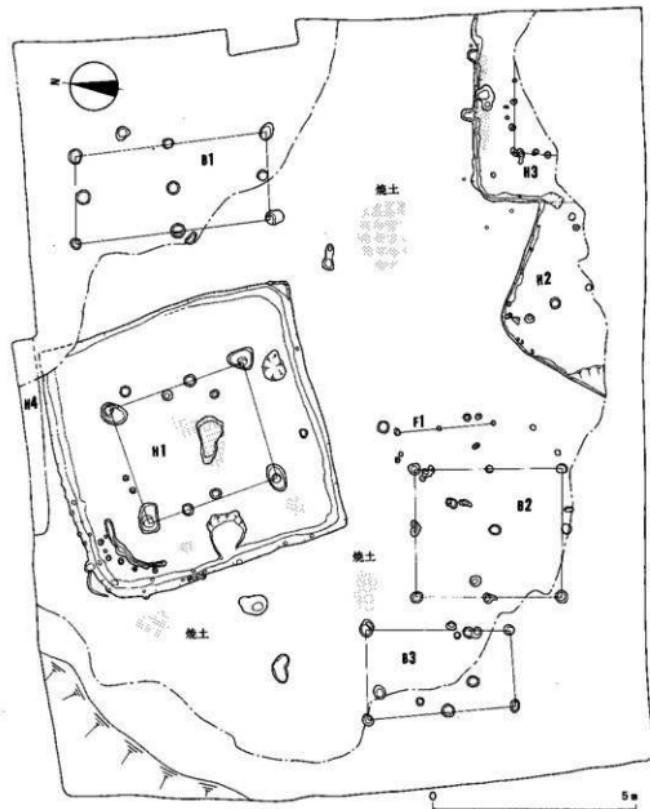
H1では壺C₁・1・壺A₂・1・壺B₁・5・壺B₂・2・壺B₃・1・壺B₄・1・高壺C₁・脚台1と壺底部4・高壺脚部2・器台脚



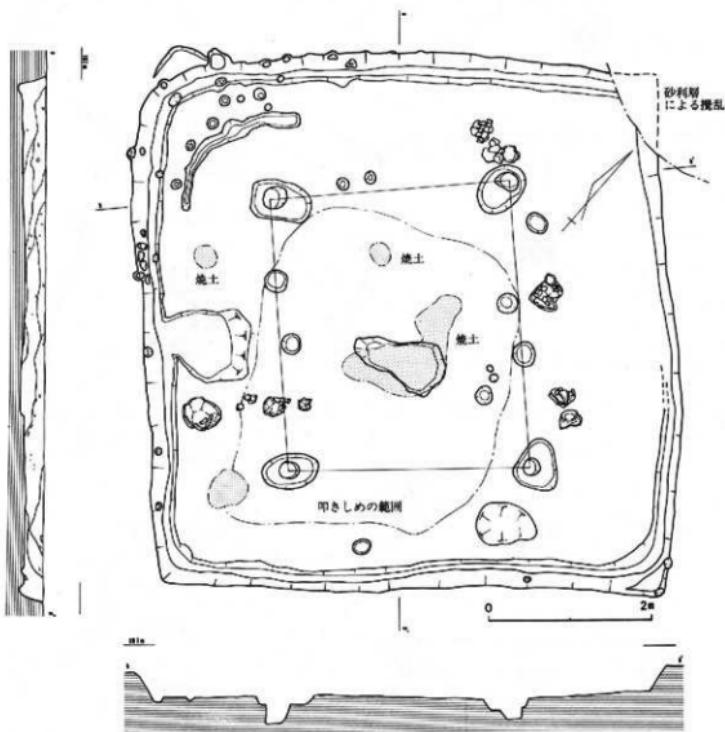
第20図 VII区埴丘壺出土遺物2

部1点床面および若干上部より出土した。

臺(1)は口縁内面から胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリによるやや外反味の直口縁を持つものである。受口



第21図 VI区造構配置図



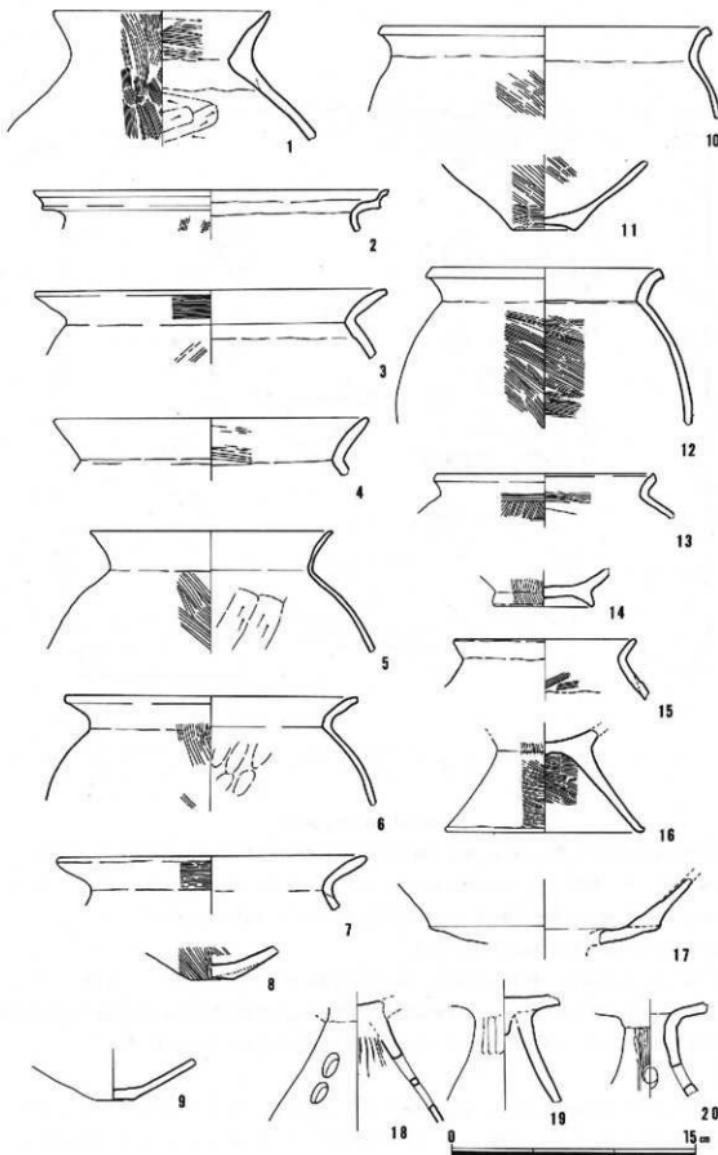
第22図 VI区H1 造構図

状口縁を呈するものは1点(2)のみである。出土土器の約半分を占める變B類(3)～(9)には口縁内外～胴部ハケメ調整のものと、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ又はヘラケズリのものがある。II区などでは後者の比率が高かったが、H1ではB₁の3点及びB₂が前者、残りの器壁の薄いもの(5)・(6)が内面へラケズリ、B₂(10)・(12)が内面ハケメとなっている。變(3)は口縁端部上面を少しつまみ上げ気味に仕上げている。

(7)・(8)、(10)・(11)、(13)・(14)は同一個体と思われる。脚台(8)は内外面共ハケメ又はナデによって入念に仕上げられている。端部外面につまみ出した張り出しをもつ。高环脚部(8)は円形のスカシを2段3方向にもつ。内面にはしばり目が残存する。器台脚部(8)は内外ヘラミガキ又はヘラケズリ等で入念な仕上げが行なわれている(第23図)。

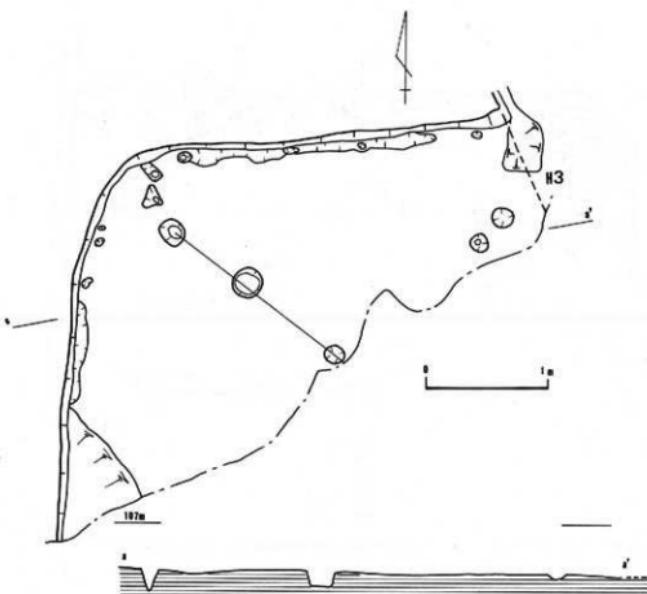
(H 2)

H 2は隔丸方形になる可能性もあるが、規模は明確でない。またH 1の主柱穴に匹敵するほど柱穴は見当らなかったが、上屋構造のための柱穴は3個、対角線ライン上に検出された。またH 1より浅いながらも、壁体溝も備え、その溝底にはH 1で見られたような小ピットも認められた。現床面は周囲より5cmのレベル差をもつだけで、すでに上面は搅



第23図 VI区 1号竖穴住居 (H 1) 出土遺物

乱されていると考えられ(第24図)、出土遺物も細片が数点埋土から検出されたのみで図示するに至らなかった。



第24図 VI区H2 進構図

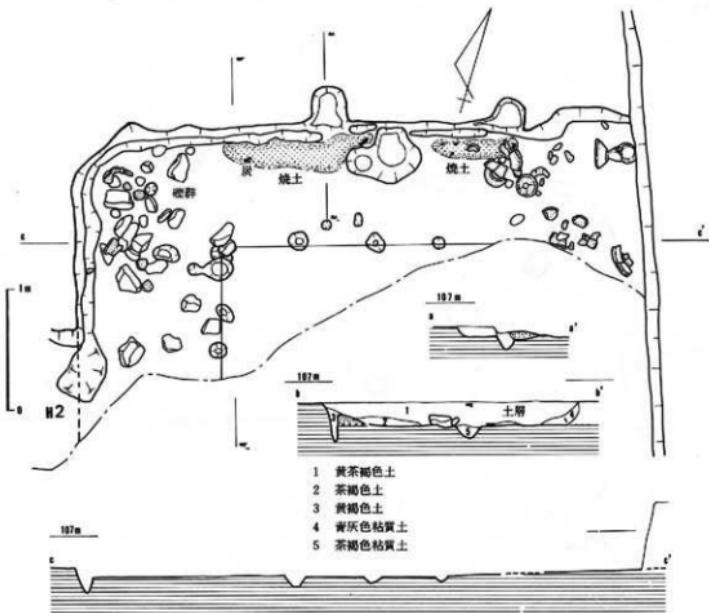
(H3)

平面おそらく方形を呈すると思われるが、南半はすでに砂礫土層により擾乱をうけ、不明である。この住居址埋土西半部において、約20個の円礫が検出された。この円礫群中には、炭・灰が混在し、この住居が埋まる以前に、屋外で炉として使用したものが落ち込んだものとも考えられる。

北壁中央付近には、舌状の深さ10cm程度に掘りくぼめた張り出しが2ヵ所認められ、それと対応するように住居址床面の2ヵ所に炭を伴う厚さ8cmの焼土面が広がる。西側のものは図にその断面を示したが、床面を若干掘りくぼめ、舌状張り出しの掘り込みは、煙道部状を呈する。従ってこれは、住居地北縁につくりつけられた炉跡と考えられる(第25図)。

H3からは甕A₃・甕A₅・高坏C・器台A・器台C₁・C₂が各1点ずつと高坏脚部1・器台脚部1・甕底部5点が床面より出土した。甕はどちらも口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケによる調整である。東海系の鉢(8)と高坏(9)は明らかに出土状態からみてセットをなす。(8)はゆるやかな「く」字状口縁にヨコハケによる多少いびつな体部をもつ。(9)は内外共にヘラミガキが施され、入念に仕上げられている。この両者は黒っぽい細砂を含み淡灰褐色の色調を呈する器壁の薄いものである。

器台(10)はゆるやかな受部を持つもので、内外に縦密なヘラケズリが見られる。器台(10)は櫛搔沈線文の上に3本1単位



第25図 VI区H 3 遺構図

の棒状浮文を4方向に備える。脚台(10)は外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデで、かなり平滑に仕上げられている。暗灰色を呈し、(8)・(9)に類似する。なお、(13)・(14)は同一個体である。底部破片(7)には粘土紐をドーナツ状に貼り付けた痕跡が残る(第26図)。

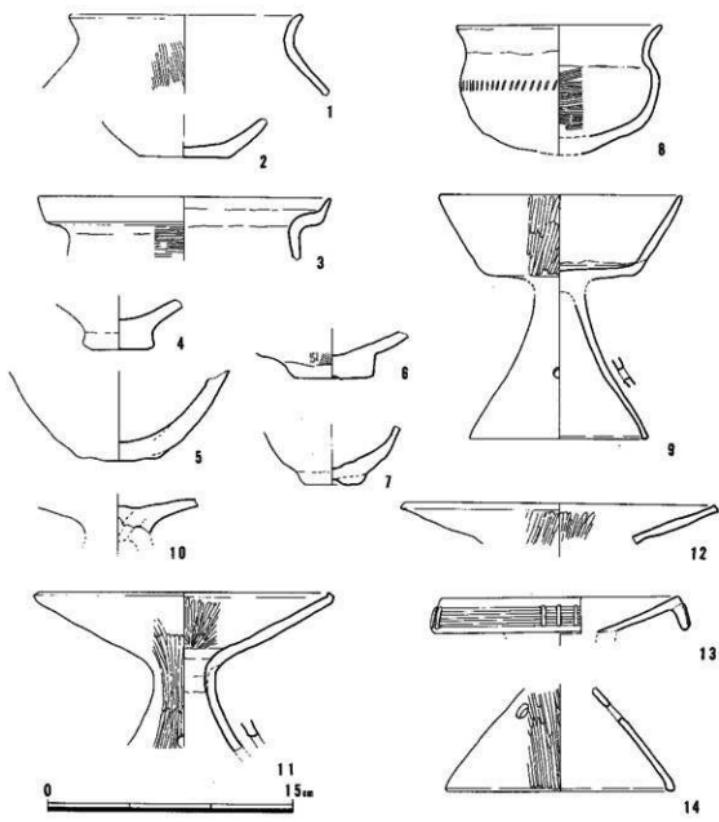
第2表 VI区H 1 遺物観察表

No.	器種	形態の特徴	整形の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	壺C ₁	頭部の内面屈曲部は厚い 外反気味の直口縁。	外面はやや難なタテハケ 口縁内側はヨコハケ、 胸部内面はヘラケズリ。	~ 2mmと5mm 大の砂を含む 赤砂あり。	内 乳灰褐色 外 "	有	
2	壺A ₂	口縁上端を丸くおさめる。 内面に粘土紐目痕残存。	胸部外面タテハケ、 口縁~内面ヨコナデ。	~ 1mmの砂を 含む。	内外共 黄灰白色	有	
3	壺B ₁	口縁上端を丸くおさめゆ くの字状に屈曲し、頭部内面に 縫を持つ。	口縁内外共ヨコハケ、胸 部外面斜行ハケ、口縁端 ・胸部内面ヨコナデ?	~ 1mmの砂を 含む。	内 乳茶褐色 外 黄茶褐色	有	
4	壺B ₁	口縁上端を丸くおさめる。 屈曲部がやや凹む。	内外共ヨコハケ。	~ 3mmの砂を 含む。 赤砂あり。	内外共 黄灰白色	有	
5	壺B ₁	やや外湾氣味。 器壁は薄い。	口縁内外共ヨコナデ? 胸部外面ハケ目、内面は 荒いヘラケズリ。	~ 5mmの砂を 含む。 赤砂あり。	内外共 黄灰褐色	有	

6	甕B ₁	口縁端を丸くおさめ、屈曲部内面に縁を持つ。	口縁内外ともヨコナデ？ 脇部外面クテハケ、内面ヘラケズリ。	~3mmの砂を多量に含む。	内 磨減のため黒色 外 乳灰褐色	%	
7	甕B ₁	くの字状に湾曲するが、内面に明瞭な縁は持たない。	口縁外面ヨコハケのちヨコナデ？ 口縁内～脇部内面ヨコナデ？	~2mmの砂を含む。	内外共 乳灰褐色	%	8と同一個体か
8	甕B ₁	底はやや凹む平底。	脇部外面ハケ目、内面時計回りのやや荒いハケ目。	~1mmの砂を含む。	内 乳灰褐色 外 暗灰褐色	%	7の底か
9	甕	底はやや凹み気味の平底。ゆるやかに外方にたち上る。	外面ナデ？ 内面不明。	3~4mmの砂をかなり含む。	内外共 赤褐色	%	
10	甕B ₂	口縁端下端に、つまみ出したような張り出しを持つ。	口縁内外共ヨコナデ？ 脇部外面斜行ハケ目、内面ハケ目？	~3mmの砂を含む。	内 濁茶褐色 外 茶褐色	%	11と同一個体か
11	甕B ₂	かなり凹んだ平底、ややくせをちらながら上方にひろがる。	底部側面は、こまがれのヨコハケ。脇部内外共ハケ。底部ヨコナデ。	~3mmの砂を含む。 赤砂あり。	内 黄灰褐色 外 茶褐色	%	10の底か
12	甕B ₂	外湾気味のくの字状口縁で、内面に縁を持つ。 口縁端下端に張り出しを持つ。	口縁内外共ヨコナデ。 脇部内外共、細い斜～横方向のハケ目。	~3mmの砂を含む。	内外共 茶褐色	%	
13	甕B ₃	口縁端を平坦に仕上げ、上端を少しつまみ上げ気味。	口縁内外共ヨコハケ。 脇部外面クテハケ。 内面ハケ後ナデ。	1mm大の砂をわずかに含む。 金雲母あり。	内外共 灰褐色	%	14と同一個体
14	甕B ₃	高台風の短い脚がつく。	底部外面ナデ。 脚～脇部外面タテハケ。 脇部内面不明。	13に同じ。	13に同じ	%	13の底か
15	甕B ₃	短か日のくの字状口縁。内面に縁を持たない。脇部はハの字状に下方に開く。 脇部に黒斑あり、粘土紐の繼ぎ日残存。	脇部外面デコボコしている、内面ハケ後ナデ。 口縁内外共不明。	2~3mm大の砂を含む。	内 赤褐色 外 暗赤褐色	%	
16	脚台B	外湾気味に下方に開く。 底部下端は丸くおさめ、上端はつまみ出した様な張り出しを持つ。 底部外面中央部がやや突出。	外面屈曲部タテハケ、その下方5mm程度はハケ後ナデ。脚台外面ヨコハケ、内面上半はハケ目、下半はハケ後ナデ消し。内面には黒斑あり。	1~3mm大の砂をかなり含む。 長石あり。	内 暗褐色 外 灰褐色	%	
17	高坏C	屈曲部は張り出し気味に縁を持ち、外上方に開く。	内外共不明。	~2mmの砂を含む。 赤砂あり。	内 乳灰褐色 外 黄灰褐色	%	
18	高坏C	円形2段のすかしが3方向に穿孔。	外面は不明。 内面上部にしばり目、下部はナデか？	2~3mmの砂をかなり含む。 荒い土。	内外共 淡黄褐色	%	
19	高坏	やや外湾気味に下方に開く。 差し込み、坏部は逆八の字に上方に開くか？	外面上部に面取り風のタテ方向のナデ。 その他は不明。	~1mmの砂をわずかに含む。	内外共 赤茶褐色	%	
20	器台	くびれ部に、粘土紐ぎ日による段差がある。 横円に近いすかしが4方向に穿孔。	外面ヘラミカキ。受部内面ヘラミカキ？ くびれ部内面ヘラケズリ？ 脚部内面ヨコナデ？	~3mmの砂をわずかに含む。 赤砂あり。	内外共 淡灰褐色	%	

第3表 VI区H3遺物観察表

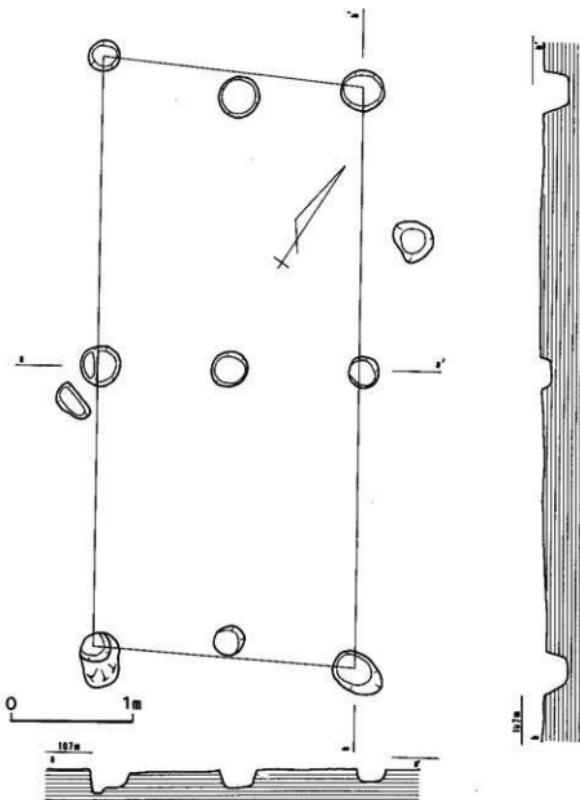
No.	器種	形態の特徴	整形の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	壺 B ₃	口縁は、やや外反気味に、ゆるやかに開く。 口縁端は、丸くおさめる。	口縁部内外共ヨコナデ？ 胴部外面タテハケ、内面ナデ？	2~3mm大の砂を含む。	内外 淡灰黄色 淡赤褐色	%	2と同一個体？
2	壺	平底、底部付近に黒斑あり。	内外共調整不明。	2~3mmの砂をかなり含む。 荒い土。	内外 淡灰褐色 淡黄褐色	%	
3	壺 A ₃	外上方に聞く受口状口縁、口縁端は、つまんでおさめる。	口縁内外共ヨコナデ？ 頸部～胴部ヨコハケ。 胴部内面不明。	~3mmの砂を含む赤砂あり。	内外共 明茶褐色	%	
4	壺	くびれがややすっぽり、平底に統く。	底部 亂方向のケズリ？ 周囲は、あまり調整が加えられていない。 その他は不明。	~1mmの砂と 5mm大の砂を若干含む。	内外 乳灰褐色 灰褐色	%	
5	壺	凹凸を持ちながら平底に近い形態を持つ。	磨滅著しく、調整は不明。	~3mmの砂を含む。	内外共 乳灰褐色	%	
6	壺	底部中央部が少し凹み気味。	くびれ部に、ハケ後ナデ。 その他不明。	~2mmの砂を少し含む。	内外 暗灰色 灰褐色	%	
7	壺	粘土紐をドーナツ状に巻き、底部に貼りつける。胴部はやや内湾気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラケズリ？	~3mmの砂を含む。	内外 黒灰色 暗灰褐色	%	
8	鉢 A	ゆるやかに外反し、口縁端を丸くおさめる。胴部は凹凸が著しい、内外共、胴部上半に黒斑を持つ。	口縁内外共ヨコナデ。 胴部外面 斜～横方向のハケ、上半にハケ状工具による刺穴文。 胴部内面 ヨコハケ。	1~2mmの黒っぽい細砂をわざかに含む 剤と良好な土。	内外 灰褐色 淡灰褐色	%	9とセットを成す
9	高環 C	円形のすかしが1方向にのみ穿孔。裾部は、内湾気味に下方にひろがり、端部端は平坦に仕上げ、内面にややつまみ出す。 环部は、ほぼ水平な环底部から逆八の字状に上方にひろがる。 内面に、粘土紐の継ぎ目残存。	环内外、脚外面ヘラミガキ。 脚部内面ナデか？	黒っぽい細砂を含む。	内外共 淡茶褐色	ほぼ 光形 首が 欠損	8とセット
10	高環	差し込み式。	外面ヘラミガキ。 内面不明、器面は誰である。	~3mmの砂を含む。 赤砂あり。	内外共 乳灰褐色	%	
11	器台 C ₂	口縁上端は、内面につまみ上げ張り出しを持つ。 脚部内面に粘土紐ぎ目残存。	口縁・脚部内面ヨコナデ。 その他はヘラミガキ。	~2mmの砂を含む。	内外 濃灰褐色 暗茶褐色	箇部 で % %	
12	器台 C ₁	口縁端面を平坦に仕上げ、上・下端に弱い張り出しを持つ。	口縁ヨコナデ。 その他内外共ヘラミガキ。	~2mmの砂を含む。	内外共 濃灰褐色	%	
13	器台 A ₁	かえりが外方にひらく。 3本1単位の棒状乳文を4方向に持つ。	かえり部4条の構造沈線文の上に、棒状浮文を貼り付ける。 外面おそらくヘラミガキ。 内面不明。	1mm大の砂をかなり含む。 石英あり。	内外 淡赤褐色 淡褐色	%	14と同一個体か？
14	脚	内湾気味に下方にひろがり、端部内面に張り出しを持つ。 円形すかしが3方向に穿孔。	外面ヘラミガキ。 内面ハケ後ナデ、かなり平滑。	~1mmの砂をわざかに含む 精良な土。	内外 暗灰色 灰褐色	%	



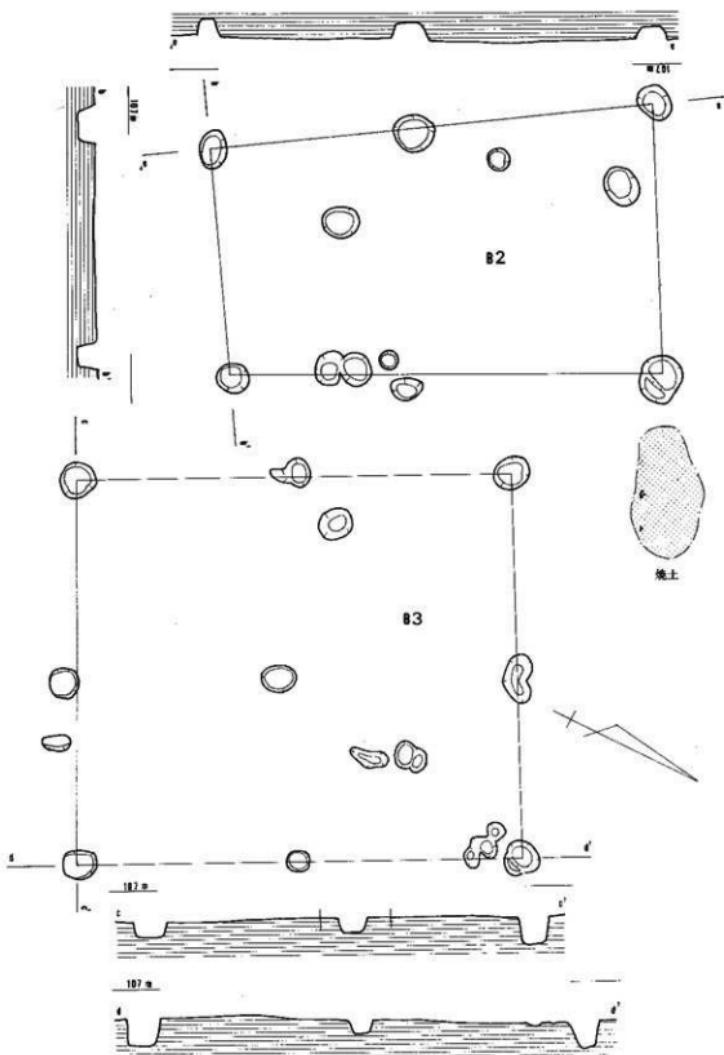
第26図 VI区3号竪穴住居（H3）出土遺物



第27図 VI区遺構面上出土遺物



第28図 VI区B 1 造構図



第29图 VI区 B 2、B 3 遗構図

(B1・B2・B3)

B1・B2・B3と称した掘立柱建物は1×2間と2×2間の規模をもち、方位は3棟ともほぼ北にとる。正確にはそれぞれ、N-35°-W、N-26°-W、N-26°-Wとなる(第28図・第29図)。

柱穴掘り方は全て径20~40cmまでで、遺構面からの深さも20cm程度であり、柱穴等は遺存していなかった。柱間の心と距離はほぼ160~220cmの間におさまる。

周囲に見られた3ヵ所の焼土面は3~5cmの厚さで堅く焼きしまっていた。このうち北西部の焼土ののる土層はH1を検出する際、H1の上に薄くかぶっており、この土を除去したことによってH1北西隅の輪郭が明瞭になったことから、明らかにこの焼上面はH1より新しい時期のものであり、これら3ヵ所の焼上面は掘立柱建物群に伴うものと考えられた。

また、B2西方で櫛痕跡が確認された。

掘立柱建物の相互の時期的な先後関係は明らかではないが、先述した北西隅の焼土面のすぐ横で同一レベルで山茶碗が1点出土した(第27図)。また現地説明会の際、サヌカイト製石鏡を1点採集した。重さ gを計る。

これは東濃産と思われる長石をわずかに含む精選された上を用い、内外共に灰白色を呈する。11世紀後半のものであろう。おそらくこれが掘立柱建物の存続期の一点を示すものと考えられ、建物の規模や柱穴掘り方の大きさ等からも大方の賛意が得られよう。

5 おわりに

(立地)

今回の調査によって、唐川集落の雨水田中に、かなり広い範囲にわたり弥生時代後期から平安時代までの遺物が散布することが明らかになった。

横山集落寄りでは石鏡1点だけの検出ではあったが、獲物を追って沖積地までやってきた縄文時代人の痕跡も認められ、I区T5での瓦の分布は、その周辺での瓦葺建物の存在を示すものであった。特にII区T6・7付近での大量の包含層中の土器群とVI区の住居址群は弥生時代後期後半ごろを中心とし、現集落の如く、北と南の二つの集落の存在を示すものである。

現在の高月町の周辺地形は高時川によって形成された扇状地・氾濫原それにその中に点々と在る自然堤防、余呂川右岸の後背湿地からなる。これまで弥生時代遺跡は扇状地上の大海上遺跡⁽¹⁾・井口遺跡⁽²⁾、余呂川左岸にあたる自然堤防上の妙光庵遺跡⁽³⁾・円通寺遺跡⁽⁴⁾等が土器の出土によって断片的に知られてきただけであり、唐川遺跡はこの地域の沖積地上によって初めての集落遺構検出である。

これまで知られてきた遺跡の分布と近年行なわれつつある上水道事業に伴う立会調査の所見によると、弥生時代の遺跡はほとんど氾濫原中に島状に在る自然堤防上にのる形をとり、また現在の集落とほとんど重複する。従ってこれまでの調査がこれら周囲に限られてきたことが、明瞭な遺構検出を見なかつた一つの原因であろう。

(竪穴住居)

VI区で調査した3軒の竪穴住居は全て幅5~10cmの壁体溝を偏え、その溝底に径5cm程度の小ビットが検出された。その相互の間隔を復元すると60~120cm程度であると考えられ、溝内に縦方向に立てられていた杭の痕跡であることはまちがいないものである。従って住居内周囲の溝はすでに壁体溝と呼称しているように住居の排水溝であることは否定され、これまで言われているように、これは竪穴住居の壁を保持する板材(?)を差し込むためのものであり、また遺構小ビットはこの板材の支持杭痕と考えられる。

こうした平面方形の竪穴の四隅や中に杭を打って横木を架し、縦板・横板・綱代などの化粧材を支える方法は大型⁽²⁾住居に限られるという。宮本長次郎はこの大型住居に特別な意味を持たせようとしているのであるが、少くとも唐川遺跡で調査した3軒の住居は全て周溝内に小ビットを備えていた訳で、そうした意見はここでは保留しておくこととする。

また遺存状況の良好だったH1では、その壁の上部に住居中心から斜方向に穿かれた小ビットがほぼ四周に見つかり、径5~10cm程度の垂木を差し込んだ痕跡と考えられる。それぞれの間隔はまばらで、何回かの垂木の位置を変えた跡⁽³⁾換えも認められるようであるが、およそ垂木間は60~80cmと推定し得る。こうした垂木の痕跡は、例えば奈良県唐古・鐵道跡で住居の周縁で検出され、これは45度の角度で架けられた垂木の径は3cmであるという。また最近の例では、島根県高広遺跡で垂木を埋めこんだ側溝をもつ住居が検出されている。⁽⁴⁾

H1の北西コーナーに近いところで検出されたL形の溝とその底の小ビットは間仕切りのためのものであろう。

ところでH1は中央に炉、一辺のほぼ中ほどに貯蔵穴をもつ比較的定型化した形態である。しかしH3の北壁で見られた2ヶ所の浅い凹状上に焼土塊は明らかに煙道部状の施設を備えたカマドに近いものである。石野博信によるとこうした「カマドの初現型」である「類カマド」は近畿地方を中心に弥生時代後期に現われるとされ、大阪府観音寺山遺跡例や鹿嶋山遺跡例などをあげている。特に観音寺山遺跡例では100軒以上ある住居址の中の1基にだけ見られるものであり、唐川遺跡と同様に一遺跡中の全ての住居址がこうした「類カマド」を備えるのではないようである。

（弥生土器）

竪穴住居出土土器の編年的位置づけについて簡単に触れてみる。⁽⁵⁾

Ⅳ区H3出土土器の中心をなす一群の土器は、唐古第五様式第一式並行期の次の段階にあたり、H1出土土器はやや新しい特徴を有する。

H3出土資料並行期は、高环についてみるといわゆる欠山式に特徴的な深い环部をもち、内湾する脚部を備えるものが出現するが、口縁が外反する通有の高环も残存する。器台の口縁は直線的に伸びるが、口縁端は垂下し沈線を施した口縁帶を持つものが主となりつつある。受口状口縁を有する妻では、口縁端を外方につまみ出すものと出さないものが共存し、明瞭な平底を有する。ただ湖北地方では受部より上が単につまみ上げ気味に伸び、肩も張らないいわゆる受口状口縁妻とは異なるものが主流をなす。またこの期の新しい相として、月影式に特徴的な擬凹線を口縁に備えた妻がやや小形のものとして出現する。

この期の他の資料として野州町下々塚遺跡S I 11や北大津遺跡黒褐色土下層J・K区出土資料の一部などがあげられる。また当該期といわゆる庄内式並行期との間には更に2型式存在し、湖北では高月町円通寺遺跡第III地区M I・長浜市高田遺跡第5層、湖南地方では下々塚遺跡S I 12・湖西線Ⅳ区3号住居址出土資料等によってこのことは認識される。⁽⁶⁾

註

- (1) 田中勝弘「高月町保延寺大海道遺跡」「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」 III-I 1976年
- (2) 田中勝弘「高月町円通寺遺跡」「は場整備関係遺跡発掘調査報告書」 III-II 1976年
- (3) 用田政晴「高月町上木道事業に伴う埋蔵文化財調査概要」 II 1983年
- (4) 宮本長次郎「住生活」「日本考古学を学ぶ」(2) 1979年 257頁
- (5) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」(「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第16冊) 1943年
- (6) 丹羽野裕氏の御教示
- (7) 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」「日本古代文化の探求・家」 1975年 92~93頁
- (8) 資料操作については、モンテリウスの研究法に対する田中琢の理解(「型式学の問題」「日本考古学を学ぶ」(1) 1978年

12~23頁) 等が参考になった。

- (9) 伊達宗泰ほか『下々塚遺跡発掘調査報告書』1981年
- (10) 中西常雄『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ—』1979年
- (11) 註(2)と同じ
- (12) 宮成良佐『高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書』1980年
- (13) 註(9)と同じ
- (14) 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』1973年

図 版



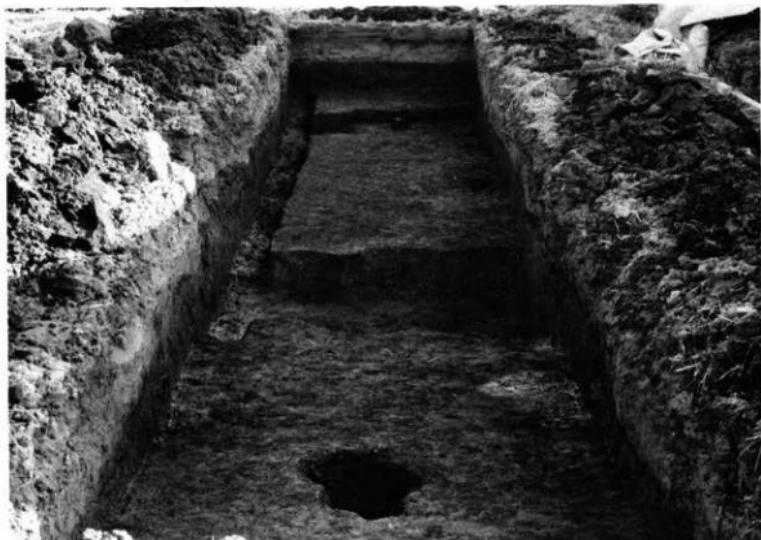
遺跡全景（北から）



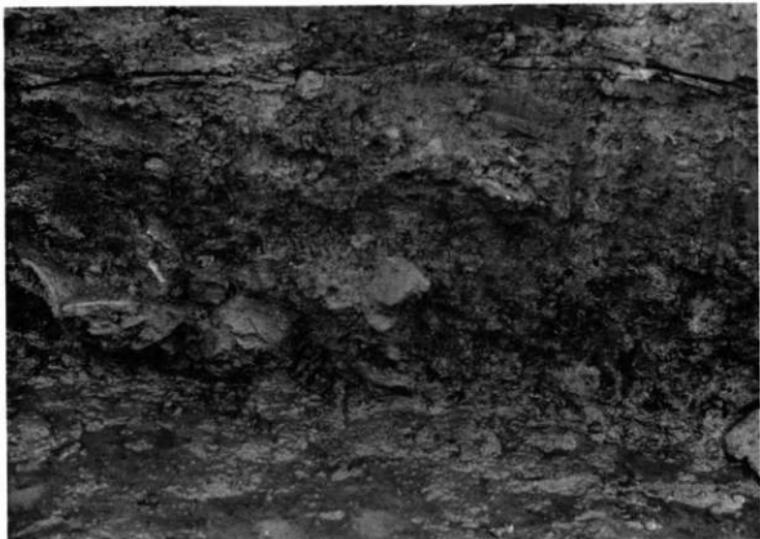
I 区 T 5 (北から)



I区T5 (南から)



I区T10 (北から)



II区T6・7遺物包含状況



III区T3（北から）



VII区墳丘全景



VII区墳丘トレンチ調査



VI区墳丘断面（北から）



VI区遺構検出状況（南から）



VII区H 3 遗物出土状况



VII区H 3 遗物出土状况



VII区H 3 近景



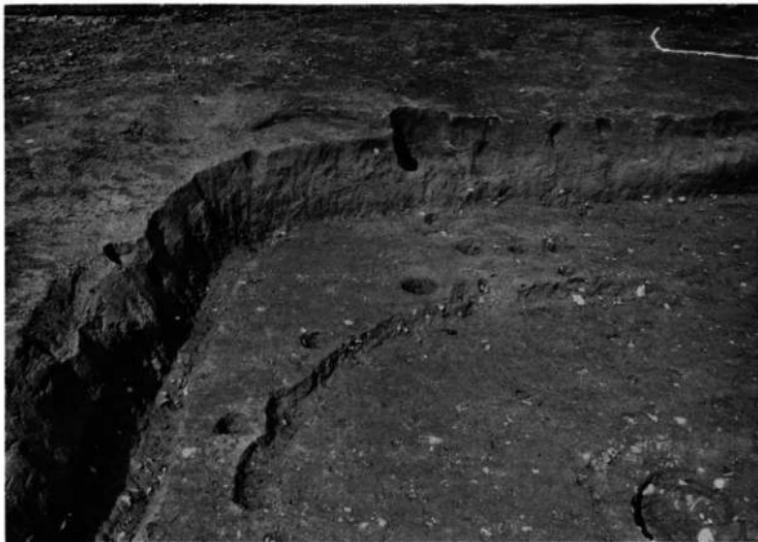
VII区H 3 完掘後 (南から)



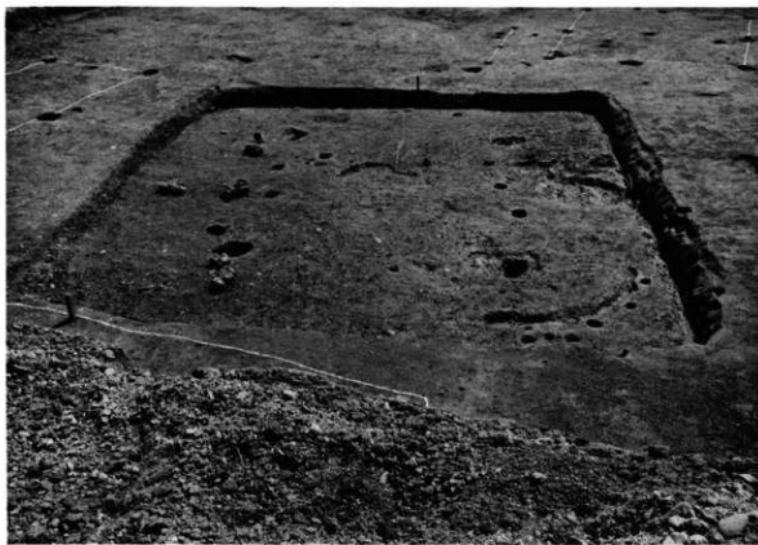
VI区H 1



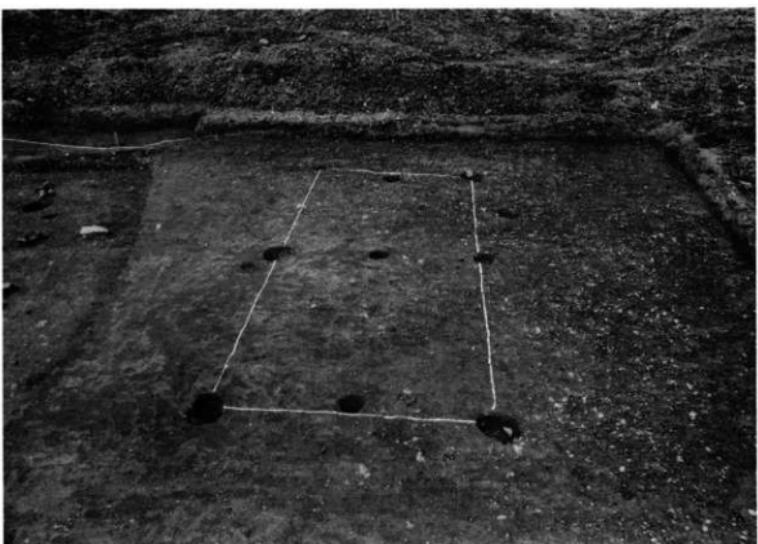
VI区H 1 西壁付近



VII区 H 1 北西隅付近



VII区 H 1 (北から)



VIK B 1



VIK B 2 - B 3



V区全景



V区H1遗物出土状况



I区T 5(1)



I区T 5(2)



II区T6・T7



II区T6・T7



II区T6・T7



II区T6・T7



III区T4・D1



VI区 H 1



VI区 H 1



VI区 H 1



VI区 H 1



VI区 H 1



VI区 H 3



VI区 H 3



VI区 H 3

II 長浜市永久寺遺跡

1 はじめに

永久寺遺跡は、現在の永久寺集落の北東部を中心に弥生時代の遺物の散布することが知られており、また、集落内や集落に近接した畠地では須恵器や土師器をはじめ瓦等の散布することが確認されている。しかし、遺跡の性格はもとより、遺跡の範囲等についても詳細は明らかにされていない。従って、永久寺地先では場整備工事が計画された時、事前に発掘調査を実施し、遺跡の範囲や性格等を確認し、工事に対する遺跡への保存資料を得る必要性が生じたのである。

調査は、文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（990,000円）の再配当を受け、財團法人 滋賀県文化財保護協会（理事長 和田純一）へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 勘定滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会 事務局 文化部 文化財保護課 技師 田中勝弘

調査補助員 藤井益雄・北脇泰久・井塚哲男・岸本好弘・荻野勉・荻野良博・辻裕

なお、この調査にあたっては、長浜市教育委員会をはじめ地元永久寺町の方々に色々とお世話をになった。ここに記して謝意を表します。

2 位置と環境（第1図）

永久寺遺跡は、長浜市永久寺町に所在する。現在の永久寺集落の北東部に遺物散布の中心地があつて、このあたりは、標高およそ93mで、いわゆる湧水線上にある。永久寺集落の南側は、北東から南西方向に走る旧河道様の地形を呈し、この部分をはさんで北側には大辰巳遺跡がある。⁽¹⁾ 大辰巳遺跡からは、弥生時代前期からいわゆる古式土師器の段階までの各時期の土器類・木器類・銅鏡等が出土している。前期は新段階のもので、量的には少なく、中期から後期の範囲のものが主流を占めている。中期前半では、甕類に近江系のものが多く、東海系のもののが少ないながら含まれる。また、畿内の櫛描横流水平文を持つ破片も若干出土している。中期中頃から後期にかけては、中期前半の系譜を引くとされる近江型の甕が多く、壺や高杯に若干の東海系のものを混じっている。大辰巳遺跡の概略はこのようなものであるが、永久寺遺跡に関しては不明な点が多い。長浜平野における弥生時代遺跡は、鴨田遺跡・川崎遺跡等、永久寺遺跡と同様の立地条件にあるものが多い。発掘調査が実施されているものも少なからず存在するが、土器類の編年さえ確立していないのが実情である。今回の永久寺遺跡の発掘調査はほ場整備事業に伴う制限された中で実施したものであり、得た成果は微々たるものであったが、少なくとも、隣接する大辰巳遺跡との比較検討が可能であり、今後、長浜平野の弥生時代社会を考えていく上で、わずかながらも資料を提示してくれるものと考える。

3 調査の経過（第2図）

調査は、ほ場整備工事による田面の切り下げがほとんどなく、工事による遺跡への影響が極めて小さいものと判断されたので、深掘が予想される排水路計画部分に2m×10mの規模のものを基本とする試掘場を設定し、遺構や遺物の包含層等の有無を確認することとした。この試掘場で得た結果により、必要と認められる範囲で試掘場を拡張するという方法を取った。試掘場の設定は、休耕地に転作として麦作を行っている個所があり、基本通りに設定できない部分もあったが、基本的には、水田1区画に1ヵ所の割合で試掘場を設け、掘削順位にTr 1, Tr 2……とナンバーを付した。結局30ヵ所に試掘場を設けたのであるが、試掘場の拡張については、Tr 20においてのみ必要性が認められた。Tr 20以外では、耕作土下は青灰色の粘土層あるいは砂層等であり、遺構や遺物の包含層等を検出できなかった。Tr 20においても



第1図 永久寺遺跡位置図（5万分の1）

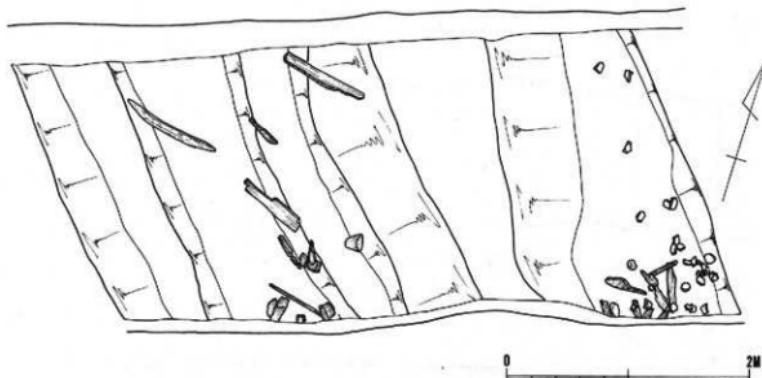


第2図 永久寺遺跡附近地形図及びトレンチ配置図

検出したのは自然流路と考えられるものであり、従って、今回の調査では遺構を検出し得ず、遺跡の性格等についての資料は得られなかった。

4 調査の結果（第3図・第4図）

今回の調査では、今年度のは場整備の対象範囲である東西400m、南北400mの範囲において、約200mの間隔をおいて敷設される東西方向の排水路計画部分にトレーニングを設定したのである。従って、現永久寺集落の南部の水田については、今回の調査結果から遺跡の広がりを確定することができる。すなわち、約160,000m²の範囲において、遺物を出土した地点は、永久寺集落の南南東約150mの地点（Tr20）のみであって、他の部分では、遺構や遺物の包含層は存在しなかった。そ



第3図 Tr20溝状遺構実測図

ここでは、表土下は青灰色粘土層あるいは砂層であって、これを切り込んだ状況で溝跡があり、その堆積土中に遺物を包含していたのである。しかし、遺構の広がりを想定してトレーニングを排水路計画範囲内で拡張したが、西側は後世の堆削がなされ、新しい堆積土があり、東側では、遺構を検出することができなかった。これを以て、遺構の広がりを確定できないが、周辺の発掘調査については、は場整備工事によって破壊されないため今後に譲ることとした。ここでは、

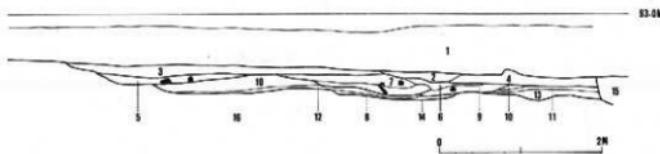
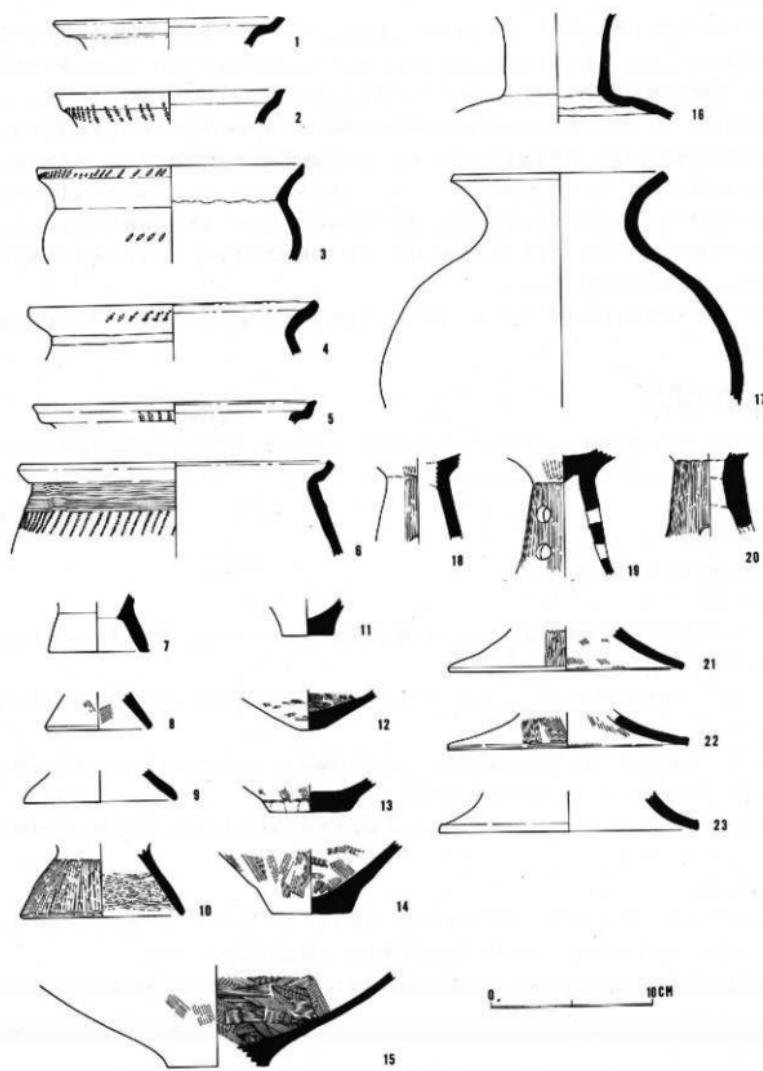


図4 トレンチ20溝状遺構断面土層実測図

- | | | | | | | | |
|----|--------------|----|----------------|----|------------|----|-----------|
| 1 | 耕土 | 2 | 暗灰色粘土 | 3 | 暗灰色粘質土 | 4 | 砂粒層 |
| 5 | 灰色砂層（木、土器含む） | 6 | スクモ層 | 7 | 灰色砂層 | 8 | 灰色砂層 |
| 9 | 灰色砂層 | 10 | 灰色砂粒層（土器片若干含む） | 11 | スクモ層 | 12 | スクモ層 |
| 13 | 砂粒層 | 14 | 灰色砂粒層 | 15 | 黄灰色粘土（擾乱層） | 16 | 青灰色粘土（地山） |



第5図 トレンチ20溝状遺構出土土器実測図

Tr20で検出した溝状遺構及びその出土遺物について報告をし、今後の調査のための資料を提供しておくこととする。

〔溝状遺構〕

溝状遺構は、南東から北西方向への流れを示すもので、幅約5m、深さ40cm程度である。溝内には、大別して3層にわたる堆積土が認められる。すなわち、頭初は、西側が後世の擾乱が大きく広がっていて明瞭でないが、黄灰色粘土の地山を削り、西傾する傾斜面を形成している。そして、この溝底に、砂礫・スクモ・灰色砂粒層等の堆積がある。次に、この堆積層を削って、東側に、幅1.8m、深さ10cm、西寄りには幅2.8m、深さ30cm程の2本の流路が形成される。この2本の流路は先後関係がなく、併存するものと考えられた。この流路を東流路及び西流路とすると、東流路では、土器片が溝の東上端より内側へ流れ込んだ状態で出土し、また、自然木や木製品等がよどむような状態で出土している。これに対し西流路では、土器類の出土は極めて少なく、溝の中央部付近で、自然木や木製品が流路の流れに沿って一定方向に向った状態で出土している。これら2本の流路が埋没して後、頭初の溝全体を覆って、厚さ10cm程の暗灰色粘土や砂が堆積し、溝全体が完全に埋っている。

このように、溝状遺構は自然流路と考えられ、埋没していく過程で、土器や自然木・木製品を包含していったものと考えられる。

5 出土遺物

出土遺物は、Tr20の溝状遺構の出土品がほとんどで、他のトレンチからは、表土層等から若干の土器類を出土したに過ぎない。出土品は土器及び木製品・自然木である。

〔土器類〕

イ. Tr20出土土器（第5図）

甕・壺・鉢・瓶・高环・器台がある。

（甕—1・2・4～6）

1・2・5は受口状の口縁部を持つもの。2・5は口縁部に刺突列点文をめぐらせる。頸部以下の形態は不明であるが、口縁部は外傾し、端部に面を取る。

4は、外反する口縁端部を内側へ弯曲させたもので、口縁部外面に刺突列点文をめぐらせる。口縁端部は丸く細めている。

6は「く」の字形に大きく外反させた口縁部は短かく、体部は口縁部径より大きく胴部径を持つ。肩部には櫛状工具による11本の沈線及びその下に同じ工具を用いた刺突列点文をめぐらせている。

以上の甕類は、1・2・5・6が砂粒を含んだ胎土で、色調が赤灰色を呈するのに対し、4は比較的胎土は精良で、淡褐色の色調を呈している。

（壺—16・17）

16は直口で、端部は遺存していないが、外反気味である。肩部は丸くカーブしている。内外面ともナデていて、体部内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。若干の砂粒を含んだ胎土で、赤褐色の色調を呈している。

17は外反して開く口縁部に球形の体部がつく。口縁端部は外傾する面を取る。内外面ともナデ調整である。胎土に砂粒を含み、淡褐色を呈す。口径は12.9cmを計る。

（鉢—3）

外反気味に開く口縁部を内側へ屈曲させ、外側に面を取って、この部分に刺突文を施す。体部は口径より大きくななく、胴部径最大個所にも刺突文をめぐらせる。

(瓶—7)

脚台のつくもの。脚は裾部の径6.2cm、高さ2.4cmと低い。脚端部には面がある。

(高坏—18~19・21~23)

18~19は筒部、21~23は脚裾部の破片。21~23はともに外反し、端部に面を取る。調整痕の残る21~22では外面を範磨きしている。内面は刷毛調整後ナデている。内面のナデは23にも認められる。18~19の筒部は裾部が21~23の形態を取るものであろう。ともに外面を範磨きし、内面をナデて調整している。18は3方に円孔を穿ち、19は上下2個一対の円孔を3方に穿っている。19には坏部のさし込みに突起が残る。

(器台—20)

内外面の調整は高坏と同じ。円孔は4方に穿たれる。

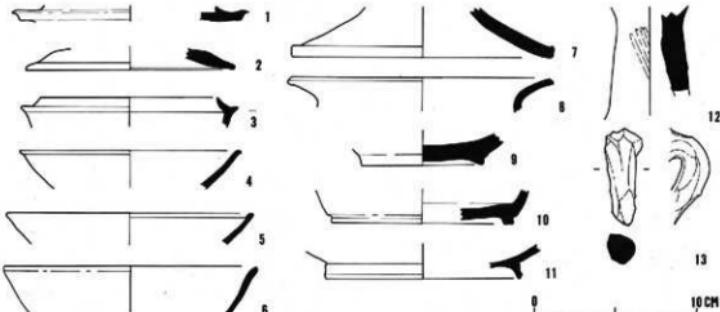
(その他—8~10・11~15)

8~10は甕の脚台であろうか。8・9は直線的に開く。内外面とも刷毛調整後ナデている。10は裾部径10.1cm、高さ4cmで、外面タテ、内面ヨコ方向の範磨きが残る。

11~15は壺あるいは甕の底部で、11は底部径3.2cmと小さく、体部の広がりは大きい。外面は不定方向の範磨き、内面は刷毛調整である。13・14は高台状の底部。13は外底面は平坦であるが、14は上底状に中央が凹む。外面はともに刷毛目、内面は13がナデ、14が刷毛目を残す。15は底部径6.2cmで、体部は大きく外縁気味に開く。内外面とも刷毛目調整。

ロ、Tr13出土土器（第6図）

須恵器・灰釉陶器・土師器等があるが、いずれも表土層からの出土である。



第6図 その他トレンチ出土土器実測図

(1~6; ドレンチ13、7, ドレンチ16, 8~13; ドレンチ18)

(須恵器—1・2・3)

3の壺身は、受部の引き出しが小さく、口縁部も内傾して窪い。2の蓋は平安時代に下るもので、扁平な天井部と端部を丸く納めた口縁部を持つ。1は不明品。

(灰釉陶器—4・6)

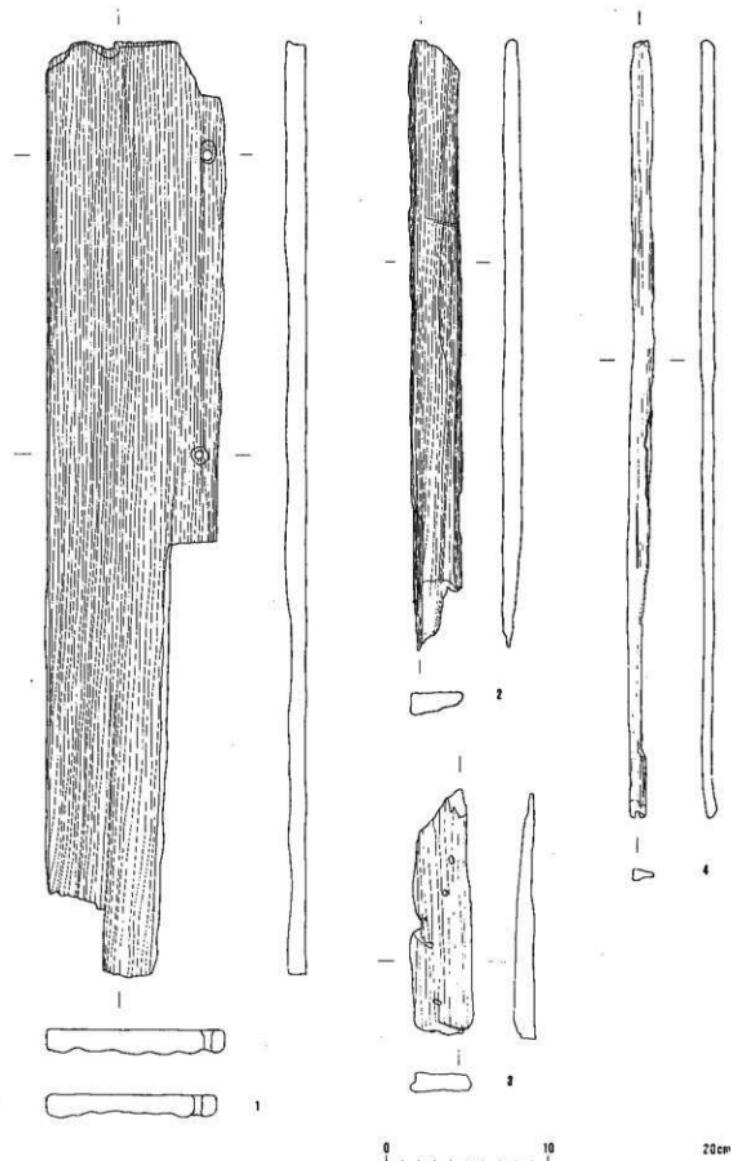
ともに椀の口縁部。口縁端部が4では外方へ小さくつまみ出して水平な面を取り、6では丸く納めている。

(土師器—5)

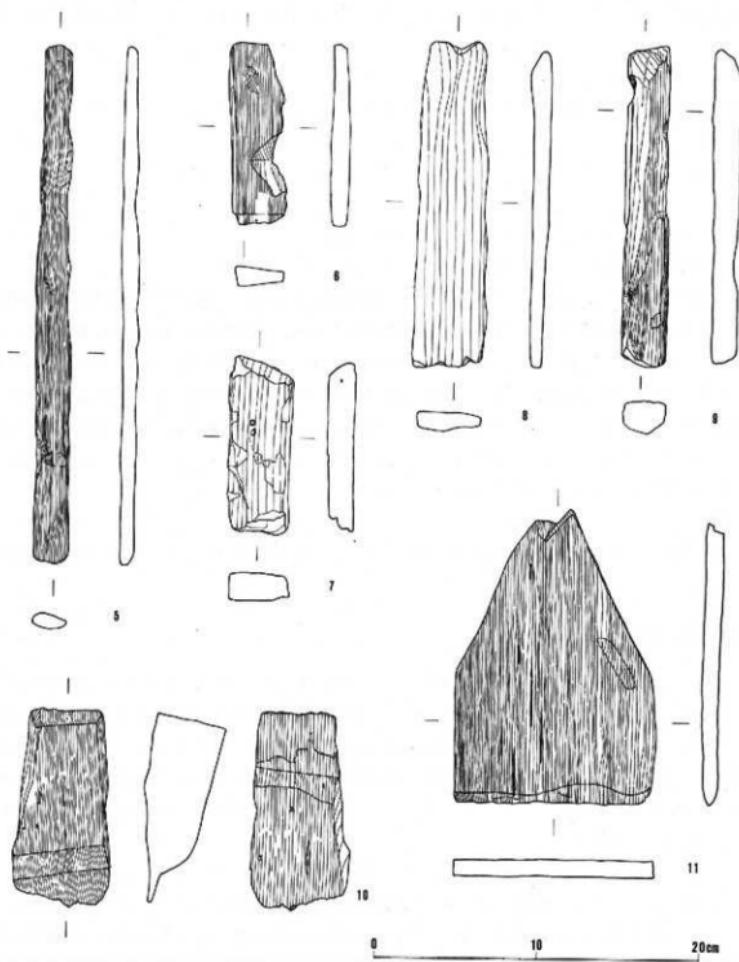
椀あるいは皿の類で、口縁端部を玉縁状に内側に肥厚させている。

ハ、Tr16出土土器（第6図）

(弥生式土器—?)



第7図 トレンチ20溝状遺構出土木製品実測図(1)



第8図 トレンチ20溝状造構出土木製品実測図（2）

やはり表土層の出土で、高坏の脚部片。形態はTr20出土のものと同じである。

ニ、Tr18出土土器（第6図）

〔須恵器—10・13〕

10は楕。体部直下に高台が貼り付けられる。高台はやや外方に開き、端面がわずかに凹む。13は四耳壺の耳の部分の破片。

〔山茶椀—9・11〕

ともに楕。9は低い三角形高台。11は胎土精良で、灰白色を呈し、極めて堅緻である。

〔土師器—8〕

大きく外反する壺の口縁部片。

〔弥生式土器—12〕

器台の筒部。円孔を穿つが数は不明。外面箝磨き、内面ナデ調整。

〔木製品〕（第7図・第8図）

木製品はTr20の溝状遺構からの出土品だけである。自然流木も含まれているが、加工品のほとんどは板状・棒状品で、用途不明のものが多い。明瞭な加工痕の認められるものは10と11で、10は、長さ12.3cm、厚さ4.3cm、幅6cmのもので、一端をやや斜めに切り落し、他端を深さ1.8cmまでやや斜めに切り、L字形の凹部が残っている。11は、長さ18.2cm、幅12.4cm、厚さ1.1cmの五角形の板状品。頂点に当る部分は欠失していて全景は不明だが、底辺に当る部分は斜めに削り落し、横断面が尖る。3・6・7・8は、残存長11cm～20.1cm、厚さ1cm～1.7cmの板状品の残欠、2は、長さ37.6cm、厚さ1.2cmとやや大規模に残る板状品、4・5・9等は棒状品である。1は、残存長57.9cm、厚さ1.2～0.9cmの板状品であるが、18.5cmの間隔で、径0.5～0.6cmの目釘状の穴があいている。

〔自然遺物〕

Tr20からは、桃核やドングリ・トチの実等木の実が出土している。その他立木があるが、加工品とともに樹種の鑑定は実施していない。

6 まとめ

以上が今回の出土土器類である。Tr20出土土器を除けばすべて表土層からの出土である。弥生式土器を除けば、古墳時代後期から平安時代末期までのものを含む。いずれも細片であるが、Tr13の环身(3)は大阪府陶邑古窯跡におけるTK217あるいはこれより新しくなる。Tr18の楕(10)は平城宮跡SD650よりさかのばらないであろうし、Tr13の环蓋(2)も同様である。Tr18の山茶椀(9)は灰釉陶器の終末を11世紀～12世紀初頭におけるものであるし、Tr13の灰釉陶器もさほどさかのばるものではなからう。いずれにしても、これら表土層の出土土器は、永久寺遺跡の時期幅を示す可能性を指摘できる程度の資料である。

次に、Tr20出土土器は、自然流路内の堆積層からの出土遺物であるが、時期的なあまりの少ない遺物といえる。壺・壺・鉢・甌・高坏・器台があるが、壺・鉢では共通して口縁部に刺突による施文がなされているのを特徴とする。壺はいわゆる近江系の受口状口縁部をなすもので、また、口縁部の屈曲は比較的小さい。高坏及び器台は、外面を丁寧に箝磨きする点共通した特徴である。また、円筒に近い筒部から大きく開く裾部に移行し、端部に面を通る形態のものである。壺あるいは壺の底部のみを見ると、外底面中央を凹ませ。高台状にするものや尖底に近い底部もある。

受口状口縁部を持つ壺では、庄内並行期と考えた高月町円通寺遺跡第III地区M1では、口縁部への刺突による施文が極めて少なくなっている。また、高坏の环部底部の凸起を持つものも見られない。鉢の施文についても体部に残る程度

である。従って、Tr20出土土器類は円通寺遺跡M1のものより古式としてよからう。

弥生時代後期の一括遺物を出土したものに、長浜市大東遺跡の方形周溝墓がある。⁽³⁾ 後期前半と後半の2基からの出土土器である。受口状口縁部を持つ壺は後半の1号方形周溝墓から出土している。ここでは、口縁部と肩部下半への刺突と肩部への沈線文で文様を構成している。この多様な施文はTr20の6の壺と共通している。

湖北町伊部遺跡も溝内の一括遺物である。大東遺跡の後期前半の2号方形周溝墓と並行すると思われるもので、鉢等はTr20に比べて古式である。⁽⁴⁾

このように、Tr20出土遺物は弥生時代後期後半の頃のものと考えられよう。受口口縁部を持つ壺では野洲町久野部遺跡七ノ坪地区のSD 2上層のものと形態、施文等と共通性があり、やはり、後期の前半にはさかのばらないとしてよからう。

7 おわりに

今回の調査は、ほ場整備工事の実施をきっかけに、現永久寺集落の南東部を中心に弥生時代集落跡の範囲、遺構や遺物の包含層の有無等を確認することが主な目的であった。結果的に、Tr20において遺物を包含する自然流路を一条検出したのにとどまった。調査が、ほ場整備工事により計画された排水路部分に限って対象としたものではあったが、弥生時代集落の広がりがさほど広範囲に広がるものでないことや弥生時代後期を中心とする遺跡であること等を知ることができた。今回の調査結果は、ささやかながらも、長浜平野における弥生時代遺跡の解明に寄与するものと考える。

(田中勝弘)

註

- (1) 中村直勝編『彦根市史 上冊』(昭和35年)
- (2) 田辺昭三他『庵谷古窯跡群 I』(平安学園考古学クラブ、昭和41年)
- (3) 『平城宮跡発掘調査報告書』VI、昭和49年)
- (4) 田中勝弘「高月町円通寺遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』III-1、昭和51年)
- (5) 中谷雅治他「大東遺跡の発掘調査」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』I、昭和44年)
- (6) 昭和54年度発掘調査
- (7) 大塚信彌他「久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—」(昭和52年)

図 版



遺跡遠景（東より）



遺跡遠景（北より）



トレンチ20全景（東より）



トレンチ20溝状遺構全景（北より）



トレンチ20溝状遺構東岸部分遺物出土状況（北より）



同上 近景（東より）



トレンチ20溝状遺構東岸部分土器出土状況（東より）



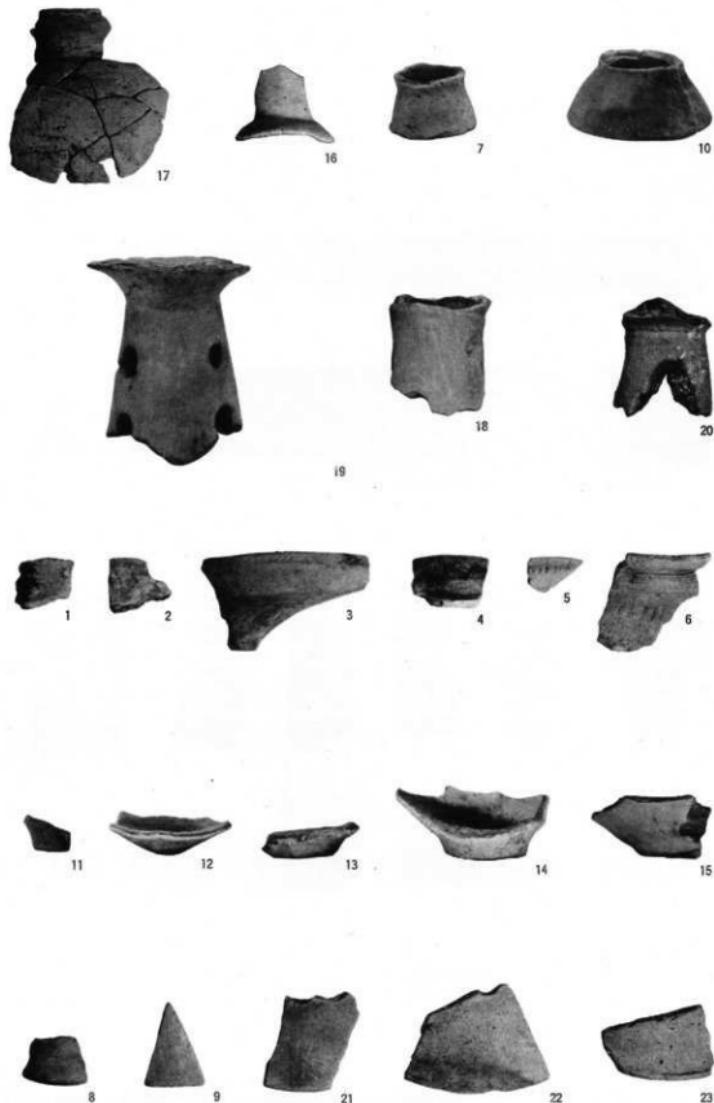
同上 木製品等出土状況（北より）



トレンチ20溝状遺構中央部遺物出土状況（北西より）



同上 木製品出土状況（北西より）



トレンチ20溝状遺構出土土器 (Nは図4のNと一致)



トレンチ20出土木製品、木ノ実 (Noは図6・7のNoと一致)

昭和56年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅸ—1

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075)351-6034